

ば、深く心を苦め、翌日ジャンヌが兄弟らを集めて、昨夜の夢を語り、且つ「汝等能くジャンヌが舉動に注意して怠る勿れ、彼女若し窃かに家を逃れんとするが如き振舞あらば、速かに捕へて之を水に投ぜよ、汝等にして之を得せずば、吾れ自ら彼女を水に沈むべし」と嚴命したり。按ずるに當時軍隊の中に婦女を伴ふ習慣ありて、隊長らも部下の兵士を操縦する必要上、寧ろ之を奨励しければ兵士は行く先々にて若き婦女を誘惑し、やがては軍隊に附隨せしめて一種の娼婦となすを例とせしかば、律義なるジャンヌの父は、其女を斯かる賤婦となさんよりは、寧ろ手づから殺さんと迄思ひしなり。

されど斯く一たび信じてよりは、ジャンヌは如何なる事ありとも其心を貫かんと決心なれば、今は父の命に背きても、神の命に従はざるべからずと思ひ定め、一日ドムレミーの近村に住める叔父の家を訪ひて、詳さに其天より選ばれたる使命を打明け、且つ父の頑として我請を容れざりし始末をも語り、涙を揮つて叔父の援助を請ひ、「父は妾が請を聽かずと雖も、一度神命を蒙りし上は、空しく之を棄て置くべからず、一日も早く密旨を太子に傳へざるべからず、願はくば妾をブークリユールに在るサー・ボードリクールの許に伴ひたまへ、妾は彼れに依りて太子の前に

到るべき道を開かん」と云ひぬ。叔父の尙ほも躊躇するを見て、言葉を切にして、「古へより

「佛蘭西國は一婦人に亡ぼされ、一婦人に恢復せられん」といふ豫言あるを知りたまはずや」と言ひければ、叔父も遂に其熱誠に動かされて、ジャンヌの請を容れ、彼女を携へてブークリユールに赴きけり。

ジャンヌは叔父に伴はれてブークリユールの守備隊長サー・ボードリクールの陣屋に至り、やがて隊長の面前に出づるや、一禮して「妾は我主の命によりて、佛國の危きを救はんが爲に此處に來れり」と、いひければ、隊長は驚きてジャンヌを熟視するに、容姿は美しけれど、服装は賤しき田舎娘が、臆面もなく斯かる大言を弄するを見て、必定狂女ならんと思ひつ、尙ほも其言ふ所を聞くに、「我主は太子の窮厄を憐み、密旨を妾に傳へて、國難を救はしむ。太子は王たるべし、妾は神の命によりて太子を灌油の式に導くべし」といひて口を噤みぬ。隊長は怪みて、「我主とは、誰の謂ぞ？」と問ふに、少女は言下に、「天の王なり」と答ふ。隊長は之を聞きて愈々ジャンヌを以て狂女なりと思ひ、「愚なる狂女よ」といひて、左右に命じて城外に引かしめ、叔父に對しては「彼女に鞭撻を加へて、父に戻すべし」と命じたり。

ジャンヌ志を得て郷里を去る

ジャンヌは第一の門出に於て失敗したれど、尙ほ毫しも失望せず、更に第二の機會を待ちけるに、其年七月、ブルゴーニュ黨の兵は再び此地方に亂入して、ドムレミーを初め近隣の諸村を蹂躪しなければ、ジャンヌの一家も一時南方なるニューシャトーの町に避難するに至りけり。然るに此間一方に於ては、英軍大舉してオルレヤンを圍み、之を攻むること急なりとの報傳はり、オルレヤンにして陥らんか、英軍は長驅してロアール河南に殺到し、正統の太子も遂に身を措くの所なきに至らんとの噂も、頻りにジャンヌの耳朶を打ちぬ。斯くて其年の末に至りては、オルレヤンの運命日に迫れりと傳へらるゝにつれ、彼の示現は愈々ジャンヌに向つて、「村を去つて佛蘭西に行くべし」と促すこと急なりければ、ジャンヌは遂に時機到れりとなし、翌年の一月會、叔母の出産ありて其看護に赴けるを機として單身ブークリユール市に入り、重ねて守備隊長ボードリクルに謁しぬ。此時ジャンヌは又もや彼れに告げて「神は屢々妾に優しき太子の許に行くことを命じたまふ、太子は妾に一隊の騎兵を許さるべし、妾はそを率ゐて直ちにオルレヤンの圍を解かん

よしや此脚を膝まで摩り減らすことありとも、妾は必ず行かん」と言ひけるが、此度は隊長も幾分少女の熱情をや掬みたりけん、無下には其請を斥けざりしも、尙ほジャンヌが説に心服すること能はずして、只何となくブークリユールに滞在せしめけり。

ジャンヌは爰にて三週間を過しけるが、其間叔父の知己なる車輪製造者の家に寄寓し、主婦を助けて或は糸を紡ぎ、或は家事の手傳などする傍らには、日々町の會堂に詣で、祈禱を凝らすことを怠らざりき。然るにジャンヌの熱誠は漸く其周圍の人心にや通じけん、狂女よと罵られ、妖巫よと嘲られし此少女の言行は、何時ともなく市民の間に多くの崇拜者を生じ、其等の人々は何れも彼の古き豫言を信じて、「此少女こそ、一度王妃イサベルによりて亡ぼされし佛蘭西を恢復する婦人なるべけれ」と言ひ合ひけり。斯くてジャンヌの風評次第に高まりける程に、ボードリクルが部下の一騎士にてジャン・ド・ノヴロンボンといふ者、一日ジャンヌの家を訪れ、半は戯れの如き口調にて「やよ、卿は何をせんとして此地には居らるゝぞ？ 王は此國より逐はれ、我らは皆英人とならざるべからざるか？」と問ひ掛け、るに、少女は之に答へて、「妾はロベール・ド・ボードリクルに説きて此身を太子の許に送らしめんとて此地には來りたれど、ボードリクル

は妾にも、妾が言葉にも一向に耳を藉さず。さりながら妾は如何なる事ありとも、大齋の中日前には、必ず太子の許に在らざるべからず。何となれば王も、侯も、蘇格蘭王の女も、佛蘭西の王國を救ふこと能はず、それを爲し得る者は只妾のみなればなり。」と昂然として言放ちけるが、忽ち悄然として、「妾は寧ろ母の傍らに在りて羊を牧ひ、絲を紡がんとこそ願へ、斯かる境遇は妾の好まぬ所なるを」と嘆じ、更に心を取り直して、「されど妾は行かざるべからず、而して我主が此身に命じたまへる所を爲さざるべからず」と堅き決心の程を示したり。之を聞けるジャンは坐ろに畏敬の情を覺えて、「卿が『主』とは誰れなりや？」と問へば、少女は言下に「上帝なり」と答へぬ。先程より次第にジャンヌの熱誠に心を動かされしジャンは是に至りて思はず少女の手を握り、「神の加護に由り、予は誓つて卿を王の許に導かん。出立は何れの日にか定むべき？」と言ひければ、少女は満面に感謝の意を表しつ、「妾は一刻も早きをこそ願へ、明日よりは今日、明後日より明日をこそ」と答へぬ。

此事忽ち全市に傳はりて、ジャンヌの評判愈々高まりければ、彼のジャン・ド・ノヴロンボンの同僚にてベルトラン・ド・ブーランジーと呼べる騎士も亦た自ら少女の護衛に加はらんと申出で、共

共に出發の準備に取掛りぬ。斯かる間に彼のボードリクールも、次第に周圍の形勢に促がされて、餘儀なく少女の要求を容れ、シノンの宮廷に使を送りて、其指令を待ちけるに、日を経て王の使節到り、「少女を伴ひて來れ」との命ありければ、ジャンヌが豫ての望みは爰に達きて、愈々二月二十日を以てブークリールを出發するに決したり。時に變亂相續きて、剽盜野武士の類到る所に出没し、道路の危険いふ許りなき頃の事なれば、勇敢なる騎士の護衛あるにも拘らず、尙ほ萬一の危難を慮りて、ジャンヌには男子の装をなさしむるに決し、ブークリールの市民らは、各々醵金してジャンヌの爲に適當なる服裝を整へけり。是より先、ジャンヌが再度のブークリール訪問を決するや、日頃の孝順にも似ず、此時のみは父母に別れを告げずして村を出でたれば、是に至りて父母に書状を送り愈々王に招かれてシノンに出發する由を告げ、曩に許可を得ずして家を離れたる不孝の罪を謝しぬ。かくて出發の日に至れば、ジャンヌは赤き百姓娘の衣を脱ぎて、市民らより贈られたる男子の衣服に更へ、甲冑に身を固め、手には長槍を執り、腰には劍を佩び、馬に跨りて市門に到りぬ。彼の兩騎士は、各々一人の従者を伴うて之に従ひ、王の使者も又一人の弓手を従へて其行を共にせしかば、一行七人は送り來れる市民らと互に別を惜み

ぬ。此時守備隊長ボードリクールは護衛の武士をして、安全に彼女を警護すべきことを誓はしめし後、少女に別れを告げ、「さらば行け、ジャンヌよ、何事の起るとも」とて其行を勵ましけり。

第五章 オルレヤンの救援

ジャンヌ佛王の行宮に達す

ジャンヌの一行がブークリクール市を立ちたるは、二月二十五日の黄昏時なりき。抑ブークリクール市よりシノン府に至る行程は、大約一百五十リーグ（一リーグ）あり、然かも此間には英人及びブルゴーニユ黨の占領せる地方介在して、路の大半は敵地を通過せざるべからざる有様なりしかば、一行は成るべく間道を選び、夜を徹して馬を驅りぬ。されば行路の困難は豫想に過ぎ、日を重ぬること十有一日、ジャンヌは其間殆んど男装を解く暇もなく、人々の危険を感ずる毎に「恐ること勿れ、神は予が行くべき道を示し給はん、予は神に導かれつゝあれば」と言ひて之を慰めつゝ、自らは何等の不安をも感ぜずして進みけるが、只其遺憾に堪へざりしは、毎

日彌撒の祈禱に參會すること能はざることなりき。かくて一行は、敵の目を忍びつゝ、行程を急ぎ、長亭短驛幾十となく馬蹄に踏破して、遂にシノン府より程遠からぬ聖カタリン・ド・フィールボアの村に着きぬ。ジャンヌは暫く此地に馬を停めて、彼のチャールス鐵槌が回教軍を撃破せる後、直ちに其劍を奉納したりといふ口碑を以て知られたる聖カタリンの殿堂に詣で、一日に三度彌撒の祈禱に參じ、又爰にて王に奉るべき一書を口授したり。其書の中には、「王に取りて最も重大なる密旨を奏せんが爲に、遙々一百五十リーグの道を踏みて來れり」と記し、兎も角も親しく引見せられんことを請へるなりき。

然れども此時シャル七世は尙ほ逡巡して決せず、取り敢へずサー・ボードリクールより致したる書状を諸大臣に示して、評議せしめけるに、諸將多くは反對を唱へて、「國家を守護するは我等の任務なるに、今名もなきロレーヌの農家の少女が、僭越にも自ら進んで國難を救はんといふは、容赦ならぬ暴言なり、速かに逐ひ還すべし」と敦圍きけれど、デュノア、ラ・ヒール及びザントレイイなどの諸將は一方より之を制して、「假令幾多の疑の餘地を存するとはいへ、ボードリクールの書簡は、明かに彼女の眞面目なることを語れり。ボードリクールとも有らん者が、假に

も陛下の許に送り越せし此少女を、未だ一回も引見せずして、空しく斥くべきものならんや？
兎も角も少女が言はむやうをも聞き、其爲さんやうも見て、然る後事を決するも遅からじ」と
言ひぬ。然るに王の廷臣らは、何れもデュノア伯らの意見を喜ばず、中にも王の寵臣にて、當時
威權朝廷に竝ぶ者なきラ・トレモイユの如きは、肩を聳やかして、「年齒僅かに十九歳に過ぎざる
賤の女の夢の如き空想より卿等は何事をか期待せらる、ぞ？」と冷嘲せり。

斯く廷議紛々として決せざりし間に、シャル七世の王妃アンジューのマリーは其母なるシチリ
ヤの王妃ヨランダと共に、王に説きて、切に彼の少女に謁見を與へんことを勧めければ、王の
意も漸く動きて、先づジャンヌにシノン府の門を入ることを許しぬ。此命に接してジャンヌは三月
六日を以てシノン府に入りたれど、未だ直ちに禁中に入ることを許されず、城外の民家に宿りて、
召命を待つこと三日に及べども、廷議尙ほ決するに至らざりき。

是より先、ジャンヌの一行がシノンに向へりとの報傳はるや、シノンの附近に野武士の一團あ
りて、豫て一行の來るを窺ひ、伏兵を設けて彼女を虜にし、王に迫りて償金を得んと企てけるが
何故にか機を失ひて事を發せざりき。野武士らは彼女の近づくを見るや、不思議にも全身棒の

如くなり、空しく地に跪きて一行の通過するを打眺めきといふ風説専らにして、人皆彼女の神通
力を讚へけるが、此頃又一人の星占者ありて王の運命を卜ひ、「一人の少女の助言により、陛下
は勝者たるべし」と奏したりけり。是等の事既に深く王の心を動かしけるに加へて、此時恰も
オルレヤン危急の警報相續いで到り、救援を請ふこと頻りなれども、援兵は既に盡きて最早送る
べき兵なく、軍費は募り盡して此上一錢の租税をも課すべきの途なし、而して王の内帑にも此時
只四片の金貨を剩すのみなりき。されど全佛蘭西の運命は、今や一オルレヤンの上に懸れり。
若し不幸にして其城の陥ることあらば、王が身は恐らく國外に奔竄するの外なきなり。此危急
存亡の秋に際して彼のジャンヌは現れたり。而して自ら天の命を受けてオルレヤンを救はんが爲
に來れりといふなり。百計既に盡き果てしオルレヤンの城民は、遙かに此噂を聞きて、俄かに
元氣を恢復し、今は少女の姿に憧る、聲城中に滿ちければ、機敏なるデュノア伯は、纔かに此期
望を以て城民の心を鼓舞し、一方王に説きて頻りに少女に謁見を給はらんことを勧めたり。是
に於て不斷なる王も遂に内外の形勢に促され、廷臣らの異議を排して、ジャンヌに謁見を許すこ
と、はなりぬ。

ジャンヌ佛王に謁して使命を奏す

時に一千四百二十九年三月九日の夜、シノン城中の大廣間には、満堂の銀燭煌々として晝を欺き、武装せる三百の騎士は、肅々として廷中に列れり。此夜王は故らに侍臣と辨別け難き服装をなし、禮装眩ゆき武官及び廷臣の間に立交りつ、ジャンヌの朝するを待ちけるに、やがて式部官なるブンドーム伯に導かれ、徐かに爰に入り來りしジャンヌは、眩ゆきばかりなる宮廷の光景にも心怯れず、靜かに瞳を凝らして王を認め、直ちに其傍らに進み、恭しく一禮して、「優しき太子よ、妾はジャンヌと呼ぶ少女なり。天の王は妾をして君に傳へしむ。君はレンスの市に於て聖なる油を灌かれ、冠を加へられ、而して佛蘭西の王たる天の王の代理とならざるべからず。神は我等の敵なる英吉利人の此國を去らんことを欲し給ふ、彼等若し去らずんば、禍、彼等の上に降らん、而して王國は永く卿の物たるべし」と言ひぬ。此光景は忽ち満堂の人をして奇異の思をなさしめけるが、此時少女が見も知らぬ王を一目にして見分けたる一事は、後に彼女が現せし奇蹟の一に加へられて、愈々衆人の渴仰を増さしめけり。

是れより王は彼女を城内の一室に起居せしめ、屢々謁見を與へて其齋せる神の密旨を聞き、又彼女を通じて種々の示現をも求めけるに、其言ふ所一としての確ならざることなかりしかば、次第に信賴の念を加へ行きぬ。中にも此日頃絶えず王が心を苦めたる一の疑問あり、そは王は豫て其母イサベルの不貞を知れるが故に、其身が果してシャルル六世の實子なりや否やとの疑ひは、早くより其胸奥底に存しけるに、形勢日に非にして、四面楚歌の聲を聞く今日此頃に至りては、此疑ひ愈々募りて、時には寧ろ疑ひを挾むべからざる事實とさへ感ぜられ、果して然らば其身はプロア家の嗣王たるべき正當の資格なきものなれば、寧ろ西班牙若くは蘇格蘭に走りて、一身の安を計るに如かじとさへ思ひ詰むること屢なりければ、王は人無き折を窺ひて、ジャンヌに此事の一端を洩しぬ、然るに彼女は嚴然として王に向ひ、「優しき太子よ、卿は何故に妾を信ぜざるぞ？ 神は卿と卿の王國と卿の人民とを憐み給へり、聖ルイとシャルマンとは彼れの前に跪きて、卿の爲に祈りつ、あり、卿は佛蘭西の繼嗣にして、王の子なり」とて、其疑の無根なることを告げ、れば、王も始めて心を安んじけり。

されど廷臣らの間には、尙ほ少女の神託に疑を挾む者多く、遂に彼女をボアチエーに送りて、

學者らの審問を受けしむるに決しければ、ジャンヌは三月十一日を以てポアチエーに至り、二週間、間に互りて種々の學者より煩瑣なる無数の質問を受けたれど、彼女の答辯、簡明直截を極め、其態度に於ても亦た人を服するの威嚴を備へ、特に博士らが、「神は何等かの徴證なしに、卿の神託を信するを禁じ給はん」と言ひて、彼女に奇蹟を要求する毎に、彼女は言下に、「神の名に於て、妾は徴證を示さんが爲にはポアチエーに來らず、妾をオルレヤンに伴へ、然らば妾は其處にて何の爲に送られたるか、の徴證を汝に與ふべし。只妾に若干の兵士を與へよ、妾をしてオルレヤンに行かしめよ」と答へて之を退くるを常としたり。是に於て更に三人の貴婦人をしてジャンヌの處女なることを確かめしめし後、學者らは其一切の調査を綜合して、一篇の報告書を作り、「彼女は善良、謙遜、敬虔、正直、淳樸の外、一點の非難すべき所なし。彼女はオルレヤンに到りて徴證を示さんとの事なれば、宜しく彼女をオルレヤンに送らるべし。聖靈の示教に背き、神の助けを無にせらるゝこと勿れ」と奏しければ、廟議爰に定まりて遂にジャンヌをしてオルレヤンを救援せしむるに決したり。

ジャンヌ武裝してオルレヤンに入る

斯くてジャンヌが宿望は漸くに達せられて、愈々オルレヤンの救援に向ふこと、なりければ、シャル七世は悉く少女が建策を用ひて、一隊の兵馬と將帥の權とを與へ、且つ王族の待遇を以て侍僧一人、侍士一人、小姓一人、傳令使二人、及び多數の從卒を給し、彼のゾークリュールより來りし兩騎士をも之に従はしめき。王は又少女の爲に純白なる鋼鐵の甲冑を造らしめ、其乗料として、王宮の厩に在りし白色の駿馬一頭を賜ひ、其佩劍は特に少女の請に任せ、聖カタリンの示現によつて、彼のフィールボアなる女聖の祠堂より掘出だせる五箇の十字架の標ある寶劍を與へて帶びしめけり。ジャンヌは又示現に従ひて白孺子の地に金糸を以て百合の花を散らせる一旒の旗を作らしめ、其面には雲に騎りて、左手に地球を捧けたる基督の像を描き、上方には「イエス・マリア」といふ文字を表し、下方には二人の天使をして跪拜せしめき。彼女は又別に聖母と天使とを描ける小旗を作らしめて、自ら之を携へたり。やがて是等の準備も整ひければ、ジャンヌは一重に出發を急ぎ、又オルレヤンの城中よりも少女の救援を促すこと頻りなりけれども、尙

ほ兵士及び糧食の準備に日数を要しければ、爰に又もや一月餘りを費やし、四月二十七日に至り數百輛の車に武器糧食を満載し、數千の兵其列後を護衛して始めてプロア市を發しけり。

ジャンヌは幼時より身體極めて健全なりしが上に、山野に生長して其發育も亦た十分なりしかば、背は高く、色澤もよく、然かも容貌姿勢共に整うて、野に咲ける百合の如く美しかりき。

加ふるに深き敬神の念は、自ら其舉動の上に平靜不動なる趣を示し、温かき慈愛の心は、溢れて温潤玉の如き風手となり、今又國運の恢復を以て己が任とせる其不拔の信念は、自然に其容貌に表れて、其無邪氣にして愛すべきうちに、凛として犯すべからざる一點の氣品をも加へたり。

されば今や燦然たる銀色の甲冑を装ひ、彼の神劍を提げて、悠然と白馬に跨れる彼女が得意の風貌を仰ぐに及びては、將帥の威容自ら備はり、窈かに輕侮の念を挟みて、婦女子の指揮を受くるを屑しと思はざりし者も、何時しか崇敬の情に打たれて、其命を奉ずる者多かりけり。彼女

の軍令は極めて簡單にして、諸軍に對し、「惟奮つて英軍を衝け、予も亦奮つて之を衝かん」と命するのみなりしが、只軍隊の風規に關しては深く意を用ひ、先づ全軍に命じて嚴に婦女を陣中に伴ふことを禁じ、全軍の將士をして悉く懺悔の禮を執らしめ、自ら青空の下に聖餐の式を行ひ

行軍の際には、一列の僧侶を先頭に立て、讚美歌を誦せしめき。粗暴不規律なる生活に馴れし兵士らは、始めは之を見て種々の漫罵を加へて、口々に冷笑しけれど、後には遂にジャンヌが敬

虔なる精神に感化せられ、軍隊の規律自ら一新したり。

斯くて一行は三日を費して二十八日の暮近くオルレヤンの對岸に達しければ、ジャンヌは直ちに進んで英軍を攘はんと欲したれど、オルレヤンの守備隊長デュノア伯は、自ら一艘の小船に乗

じて來り迎へ、言葉を盡して其無謀を説き、且つ城内の民がジャンヌの入城を待つこと切なるの

状を述べて、「若し卿を伴ひ歸らずんば、彼等は何事を仕出來すやも圖られず」とて、熱心に其入城を勸説せり。是に於てジャンヌも曲けて其言に従ひ、自ら少數の從者と共に先づ河を渡りて

間道より城中に入り、軍隊及び糧食の大部は、プロアの橋梁を迂廻して、本道よりオルレヤンに向ふこと、定まり、ジャンヌは二十九日の夜を以て難なくオルレヤンに入城せり。迎ふる城民も迎

へらる、彼女も、共に久しく期待したる其夜の光景よ！其純潔なる身に相應しき純白の甲を着け、勇將デュノアと相並びて雪の如き白馬に跨れる少女の前には、彼の神聖なる白地の軍旗高く夜の空に翻へり、後には此日城外まで出迎へたる守備隊の諸將を始め、重立ちたる市民ら肅々と

して打續きぬ。此時市民らは手にく松火を掲げて道の兩側に集り、彼女の近づくを見るや、先を争うて其上衣に、馬に、靴の尖端の觸れんとする様は、さながら救世主の天より降れるが如く、天の使命を帯びたる此女聖の城内に入る上からは、日ならず英人の圍みの解けんこと最早疑ひなしと思ひけり。一行は先づ城内の聖堂に赴きて熱心なる感謝の祈禱を獻けし後、彼女を送りて其宿舎に當てられたるオルレヤン公の重臣ジャック・ブリーシーの邸に入りぬ。

第六章 ジャンヌの偉勳

ジャンヌ 英人に退去を命ず

英軍がオルレヤンの包圍を始めしより既に半歳を過ぎぬ。佛人は死力を盡して戦ふと雖も、救援の望は全く絶えて、四月の末に至りては、城の運命も最早窮まりぬと見えたる時に當り、突如として包圍軍の陣營を訪れたる二人の軍使ありて英軍の將に宛てたる一封の書狀を齎しぬ。其書に曰く、「英吉利王及び佛蘭西王國の攝政と自稱する汝、ベッドフォード公よ、汝、サッフオー

ク伯ウイリヤム・ド・ラ・プールよ、右のベッドフォード公の副將と自稱する汝ジョン・タルボット及び汝スケールズ卿トマスよ、天の王に對する汝の道を盡せよ。天の王なる神より送られたる處女に、汝等が佛蘭西に於て攻略せる諸市の鍵を還附せよ。汝等オルレヤン市の前面に在る弓手、戦士、紳士及び其他の人々よ、神の名に於て、速かに汝等の國に歸れよ。予は佛蘭西全國より汝等を驅逐せんが爲に、天の王より送られたる者なり。云々と、英軍の諸將は此傲慢不遜なる書狀を受けて、且つ異み、且つ怒りけるが、是より先、一人の少女ロレーヌの境上なる山中より現れ、自ら天の使命を受けて、佛國の危急を救ふべき大任を負ひたりと稱し、シノン宮廷に赴きてシャルル七世に謁し、種々の奇蹟を現はしたりとの風説軍中に傳はり、佛人は此少女こそは、古來佛蘭西に流布せる「ロレーヌより一處女來りて佛蘭西を救はん」と言へる豫言に適へるものなりと言囉し、且つは「オルレヤンの圍を解かんが爲に現れたる天使なり」と唱へて、城内にては其入城を待ち詫びつ、ありとの風聞を耳にせる折柄なりければ、「さてこそは噂に聞ける妖巫の所爲なるべし」とて、直ちに其使を捕へて、一人は種々の凌辱を加へたる後「汝等男子と生れながら鄙賤なる一女子に屈從し、其命令に甘んずるとは何事ぞや」と散々嘲罵を加へ、放ち

還し、他の一人は妖巫の徒なれば法に従つて焚刑に處すべしとて之を獄中に留めたり。

されど此時より敵の軍中には、白色の甲冑を被り、白馬に跨がり、右手には降魔の寶劍を揮ひ左手には白地に聖母の畫像を顯はせる小旗を提げたる不思議なる少女の姿出沒して、其一たび基督の畫像を畫ける大旗を翻へして佛軍の陣頭に現る、や、兵士らはさながら別人の如くになりて、軍氣俄かに昂り、向ふ所靡かずといふことなれば、英軍の將士は何れも奇異の想ひをなしこれ妖術の力に外ならずとて、窃かに畏怖せざるはなかりけり。されば五月四日に至り、彼のブローアに迂廻せる援軍が、其輜重を護送してオルレヤンに近づける時、ジャンヌはラ・イールと共に一隊の兵を率ゐるて城を出で、之を迎へて城内に入りけるが、英人の監視せる堡壘の間を通過せるにも拘らず、英人はジャンヌが妖術の風評に心臆して、何等の抵抗をも試みざりき。

ジャンヌは戰に臨み、常に劍を執つて先頭に進みたれど、一度も之に刺らせることなかりき。蓋し彼女は戰を好めるにはあらず、是を以て其オルレヤンに入るや、先づ英人に書状を送りて、其退去を求め、若し聽かれずんば戰つて之を攘はんとせるなり。されど彼女はブローアよりの援軍を待てる五日の間に、尙ほも平和の手段によつて、英人をして圍を解かしめんと欲し、再び軍

使を送りて、英軍の將士に退去を促したれど、彼等は塔上よりジャンヌを嘲りて、口々に「娼婦よ」と呼び、「牛乳絞りの女よ」と叫び、「やがて捕へて焼き殺さん」と罵りければ、ジャンヌも流石に涙を流して憤り、神を呼びて其無念を訴へけり。されど流血の慘を見るに先ち、重ねて自ら諭さんとて、一日英兵の據守せる彼の「小塔」と相對したる堡壘に登り、聲を張り上げて「神の名に於て、汝等速かに退去すべし、然らずんば悔恨と恥辱とは直ちに汝らの上に下らん」と叫びけるに、「小塔」の守備隊長サー・ウィリヤム・グラスデールは塔上より聲を放ちて、「速かに汝が家に歸りて牛を飼へよ」と嘲りしかば、ジャンヌは之に向ひて「汝等はやがて退去すべし、汝の部下は悉く死せん、然れども汝はまた生きてそを見ることなかるべし」と呪ひけるが、後果して其言の如くなりき。

英軍圍を解きてオルレヤンを去る

初めジャンヌのオルレヤンに入るや、翌日直ちに英軍の堡壘を襲うて之を退げんとの心ありしも、諸將の意見を容れて、彼のブローアを迂廻して來るべき援兵の入城を待つこと、なしけるに、

五月四日に至り、援兵も無事に入城しければ、其夜直ちにロアール河の北岸なる聖ルイの堡壘を襲うて之を拔けり。翌日は基督昇天日なりしを以て、出で、戦はず、六日の早朝を期して一時に城門を打つて出でロアール河南の敵堡に總攻撃を行ふに決しぬ。激戦は二日に亙り、第一日に於て佛軍は既に聖ジャン・ル・ブラン及びレ・オーギュステンの二砦を抜きければ、今や英人が河南に於て保てるは只彼の「小塔」の堡壘あるのみ。此堡はオルラン第一の堅壘にて要害の地を占めたるが上に、英の猛將グラスデール、五百の精兵を以て之を死守しければ、第二日の攻撃は頗る苦戦にして佛軍が幾回の猛襲も其效なく、空しく撃退さるゝのみなりき。此時ジャンヌは心を焦ちて、旗を塹岸に樹て、自ら濠の中に躍り入りて梯子を牆壁に掛け、眞先に攀ち上らんとせし折しも、英の弓手が射出したる一箭、風を切つて彼女の肩先に飛來り、「小甲を貫きて領と肩との間に立ちければ、彼女は眞逆様に地に落ちたり。此状を見て英人は大いに力を増し、愈々寄手を苦めければ、デュノア伯も身方の旗色悪しきを見て一時攻撃を中止するの外なしと思ひ、退軍の喇叭を吹かしめけり。時にジャンヌは從者に扶けられて其場を去り、草上に横はりて甲冑を解きけるが、初めは出血を見つ、身を慄はして涕泣せしも、心を勵まして一心に神に祈りける

程に、忽ち勇氣を恢復しければ、奮然として自ら其矢を抜き棄て、傷口に油を塗りて、繃帯を施しつ、ありしに、忽ち喇叭の聲を耳にしければ、使をデュノアの許に送りて「我等は程なく堡に入らん。暫時兵を息めて、飲食せよ」と言はしめたり。斯くて彼女は手早く甲冑を着け、暫く祈禱を凝らせし後、再び神旗を押立て、敵壘に向ひけるに、佛軍の將士は彼の神旗の動くを見るや、俄かに勇氣を回復して敵壘に迫りぬ。英軍にては終日の防戦にて彈藥矢石も既に盡き果てし所へ、一度死せしと思ひし不思議の少女が、再び出現して攻め來りしを見て一同驚愕して色を失ひ、殆んど防戦の策なかりき。此間に城中の兵も亦た對岸の堡砦より砲彈を「小塔」に雨注し、遂に破壊せる石橋に板を架して北方より「小塔」に迫りければ、守備兵は前後に敵を受けて愈々狼狽し、守を捨て、本營に逃げ込みけり。猛將グラスデールは身方をまとめて安全に本營に引上げさせんものと尙ほも追ひ迫る敵を防ぎつ、彼の外郭より本營に通ずる吊橋を渡りし時、佛軍の砲彈飛來りて忽ち橋を摧きければ、グラスデールを始め橋上に在りし勇士らは、急流の中に陥りて無残なる最期を遂げき。是に於て佛軍は直ちに本營に迫りて之を陥れ、ジャンヌは十月以來久しく鎖されし橋を渡りて城中に凱旋しければ、市民は狂喜して之を迎へ、勝利を祝す

る寺々の鐘の音は終夜城中に響き渡りぬ。

翌朝英軍は拂曉より出動し、オルレヤンに面して隊伍を布き、さながら戦を挑むが如くなりければ、ジャンヌは蹶起して城門に到りしも、此日は日曜日なりければ、嚴に攻撃を禁じ、門外に祭壇を設けて感謝の祈禱を獻けたり。此間英人は旗を翻へし、喇叭を鳴らして、頻りに虚勢を示したれど、却つて城に背を向けて徐々に退却を始めければ、ジャンヌは之を聞きて、遙かに敵の方を見やりつゝ、「オルレヤンより去れ！ 汝等の生命は救はるべし」と連呼し、左右に向つて「彼等を去らしめよ。我主は今日戦ふを欲し給はず。汝等は他日彼等を獲ん」と言ひて追撃を誠めけり。蓋し英人は連日の敗戦に軍氣俄かに沮喪し、諸兵皆不思議なる少女の魔力を恐るゝこと甚しかりければ、諸將相議して遂にオルレヤンの圍を解くに至りしなりけり。

ジャンヌがオルレヤンの城に入りしより、是に至るまで僅に八日にして、さしも危急に迫りし城の運命を轉回し、一舉にして七ヶ月に互りし敵の長圍を解きたるは、洵に一大奇蹟とも稱すべし。斯くして彼女が博士らの面前にて誓ひたりし徴證は明かに示され、佛國は實に此一舉によりて救はれたるなりき。是に於て佛蘭西の國民は貴となく賤となく、皆其偉勳を讃へて、佛國

再興の恩人となし、「オルレヤンの處女」の名は遍く都鄙に喧傳せられ、諸人の之を崇拜すること宛然神の如くなりき。

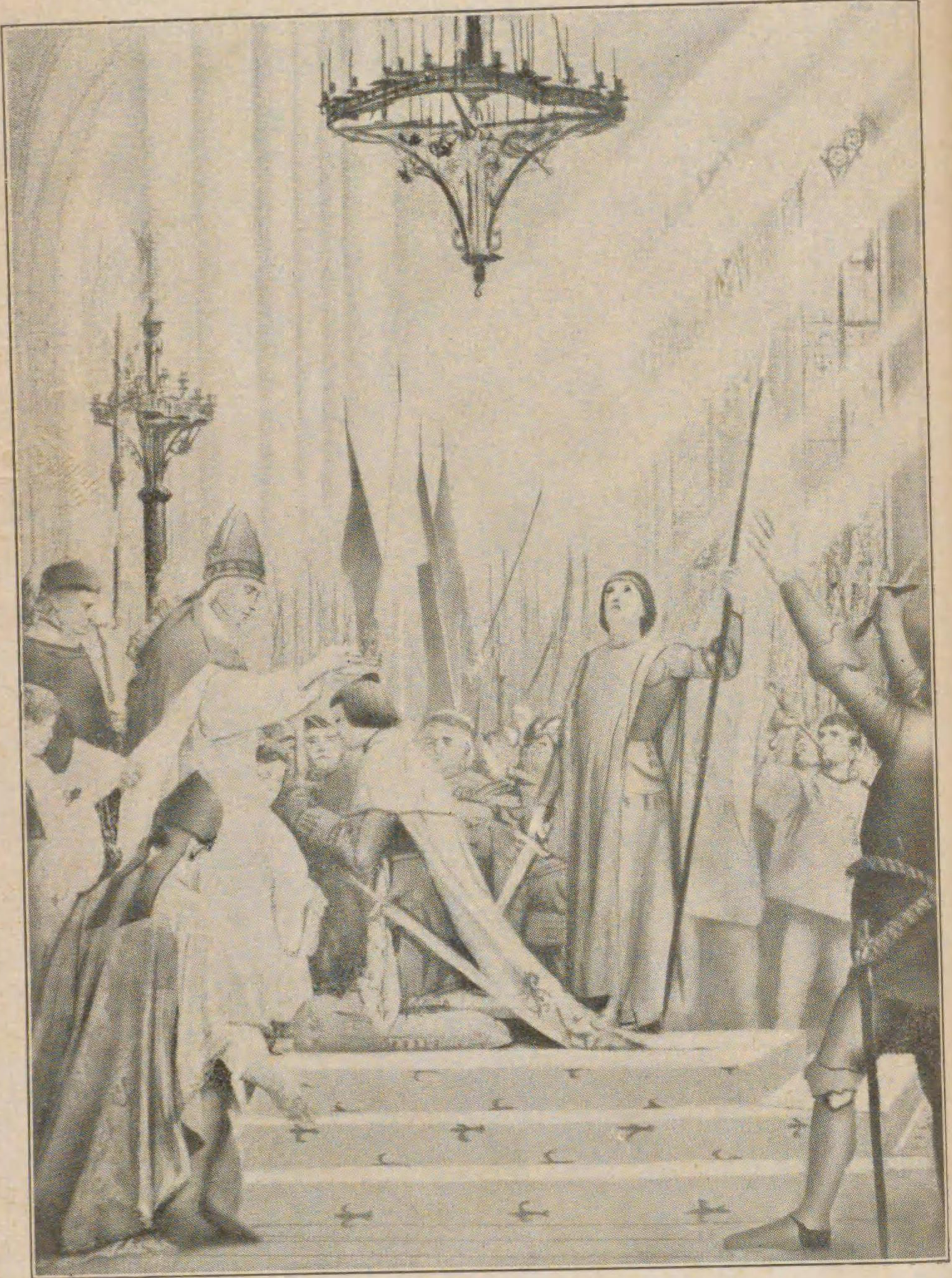
ジャンヌ佛王を導きてレンスに入る

オルレヤンの圍解けて、ジャンヌが天より享けし使命の一半は果されたれど、尙ほ第二の使命を遺せり。彼女は更にシャルル七世をレンスに導きて即位の式を行はざるべからず。蓋し彼女の深き宗教心の奥底には、佛國歴代の慣例に従ひ、レンスの大會堂に於て、彼の神聖なる油瓶より神の油を受けて、加冠の式を全うするにあらざれば、眞に佛國の王たる資格なしとの念宿りければ、彼女は王が此式を受くるまでは、いつも王の名を用ひずして、「太子」の稱を用ひたり。さればフランスの即位式は、彼女に取りては最も重大にして嚴肅なる意味を有し、聖ルイの嫡流たる太子を佛蘭西正當の王位に登さざる限りは、其神より命ぜられし任務を果すこと能はずと思惟せしなりけり。是に於てオルレヤンの圍解くるや、ジャンヌ直ちに城を出で、ツールに到りて王に謁し、速かに大森をレンス市に進められんことを請ひ、且つ「妾は最早一年とは存ふまじ、我

らは此一年を善く用ふることを考へざるべからず、我らが爲すべき事は多くあれば」と語りて、
 其決行を促しけれど、レンスに至るには尙ほ敵の諸城を降さざるべからざりしかば、空しく評定
 に日を過して廟議容易に決せざりしも、此間ジャンヌは先づロアール河附近の敵を掃蕩せんとて、
 アランソン公以下の諸將と共に兵を進め、相續いでジャルゴー、ミュオン、ボージャンシーの諸壘を
 抜き、又バテイに於て敵の援軍を撃破し、サフオーク伯、ジョン・タルボット、スケールス卿以下多
 くの勇將を虜にせり。是に至りて王も遂に意を動かしければ、六月二十八日、一萬二千の兵を
 率ゐて途に上り、往くくトロア、シャロンの諸市を降し、七月十六日を以てレンスに入り、翌
 日其大會堂に於て莊嚴なる戴冠式を行ひ、王はレンスの大主教より神聖なる灌油の式を受けたり。
 此時彼女は甲冑を帶し、旗を執りて、聖壇の傍らに立ちけるが、やがて王の前に進みて其足に接
 吻せし時には、感極つて、紅涙瀧の如く兩頬を流れたり。

悲壯なるジャンヌの最期

斯くてジャンヌはシノンに於て佛王に謁見を許されしより、纔かに三ヶ月にして、其天より命



……ち立に傍の壇聖てり取を旗し帶を冑甲は女彼時此

ぜられし二個の任務を果しければ、「今は再び父母の許に歸りて牛羊を牧せん」との念頗りなりけれども、佛國上下の景仰は、俄かに彼女の君側を去ることを許さざりき。加ふるにオルレヤンは救はれたりと雖も、英人は尙ほ巴里の都に據りて、國內に跋扈する有様なりければ、彼女は更に王の爲に英人を國境の外に攘はんと心を決しぬ。「吾等は巴里を取らざるべからず。巴里にして吾等のものとならば、佛蘭西全國は吾等のものとならん、妾はドムレミーに歸りて再び幸福を受けん」と叫びて、ジャンヌは王を促してレンスを發し、行く／＼ラン、ソアソン、コンピエーヌ、サンリ、ボーエーの諸市を徇へ、九月八日、一隊の兵を率ゐて巴里に攻寄せけれど、佛軍利あらず、彼女も敵の狙撃を受けて膝を傷つけければ、王は一時攻撃を中止して徐ろにロアール河の方面に退軍せり。然るに翌二千四百三十年の春となりて、ブルゴーニュ公の軍大舉してコンピエーヌの城を圍みければ、ジャンヌは一隊の兵を率ゐて救援に向ひ、五月二十三日、敵の未だ備へなきに乗じて其前衛を破らんとし、手兵五百騎を以て前門より打つて出でけるに、ゆくりなくも敵の重圍に陥り、遂にブルゴーニュ軍の虜となりぬ。

ジャンヌは初めリニー伯ジャン・ド・リュクサンブールの手に在りて六ヶ月の間其領内の諸城に囚

禁せられしが、此間佛王は何故か此國家の恩人を救ふべき何等の手段をも取らざりしかば、遂に十一月に至り、英國側の攝政ベッドフォード公はリユクサンブルに説きて、此貴重なる捕虜を購ひ、之をルーアンの城に移送せしめき。由來英人は彼女を憎むと甚しく、常に「彼女を捕へて焚殺せずんば已まず」と公言せることなれば、是に至り直ちに「彼女が教會の掟に背きて、妖術を行へり」との理由を以て、之をボーエーの主教の主宰する宗教裁判に附して、其罪を審問せしむるに決したり。宗教裁判の審問はそれより數ヶ月に亙り、巴里大學の諸博士と教會の高僧とは、力を盡して此少女を異端の罪に陥れんと苦心し、手を替へ品を替へて様々に糾問を重ねたる結果、「彼女は神の掟に背きて男子の服を着けたり、彼女は其故郷の魔木の下にて悪魔と媾合したり。彼女の示現と稱するは悪魔の行爲なり云々」の理由を以て、彼女を一個の妖巫として、焚刑に處すべしとの宣告文を作り、之を讀み聞かせて、更に其頑強なる心を翻へして教會に復歸せんことを勧告したり。此時まで「妾は飽までも前言を主張す、……妾が身はよしや柱に縛られ、火焰の中に焚かる、とも、誓つて妾が主張を變へざるべし」と言ひ通して怯まざりし彼女も、如何にしたりけん、此時遂に博士らの勧告に従ひて、俄かに其抗言を取消し「妾は教會に復歸せん」

と叫びければ、裁判長は少女をして一篇の告白文に署名せしめ、爰に改めて破門の罪を赦し、以後必ず行狀を改め、又決して男装をなすべからずと誠め、終身禁錮の刑に處し、悲哀の麵包と痛心の水とを與へて、其罪を神に謝せしむることを宣告したり。されど其後二日を經てジャンヌの胸中には、其前日の告白を悔ゆるの念湧然として起り、「我「聲」は爾來彼の告白によりて妾が爲すべからざる大罪を犯せりと告ぐ。妾が一切の告白は、此身の焚かる、事を恐れてなしたるのみ」と公言して其自白を翻へせしのみならず、番兵の凌辱を防がんが爲に再び男装に復りければ、高僧らは彼女を以て再び異端に復れるものと認め、神の敵たる逆徒として焚刑に處することを宣告せり。翌朝ジャンヌは八十人の騎士に護衛されて獄舎を出で、ルーアンの廣場に設けし刑場に導かれ、衆人環視の前に於て最後の宣告を與へられぬ。彼女が最後の祈禱を終るや、「異端、再墮落者、背教者、偶像崇拜者」と記したる異教帽は其頭上に置かれ、彼女の身は忽ち火刑柱に縛せられぬ。火は積重ねたる薪に點せらる、よと見る間に、火焰は高く柱を包み、炎々たる焰の中より聖者の名を呼び續くる彼女の聲は物凄く聞えたり。あはれ不思議なる威力を揮うて、一たび其祖國を救ひたりし此少女も、年齢纔かに二十歳にして脆くも一片の煙と化しぬ。時に

一、千四百三十一年五月三十日、シノンに於て初めて佛王に見えしより二年の後なりき。

百年戦争の終局

ジキヌヌ・ダルクは数奇なる運命の手に導かれて、世にも傷ましき最期を遂げたれども、其一度佛人の心中に點じたる愛國の熱火は、益々擴まりて烈々たる猛火となり、其死後五年を経て佛人は再びバリを恢復し、二十年の後にはカレーを除くの外佛國の全土にまた英人の足跡を殘さざるに至りぬ。是より先、攝政ベッドフォード公は偏に英國の勢力を挽回せんと心を勞し、一千四百三十一年には英王を巴里に迎へて莊嚴なる戴冠式を擧げ、以て佛國の民心を新たにせんと試みたれど、佛人の敵愾心はジャンヌの殉節によりて愈々振興し、英王が無二の身方たりしブルゴーニュ公オラ終に宿怨を釋きてオルレヤン公と結び、兵を合せて英軍に當りければ、流石のベッドフォードも愛憤の極病を發して死し、程なく巴里は佛人の手に恢復せられぬ。爾來英軍は益々萎靡して退嬰を事とせるに反し、從來優柔不斷なりし佛王シャルル七世は、其性行漸く一變して、政治上の能力を發揮し來り、ブルージュの毛皮商にして勤王家なるジャック・クールを登用して大に財政

を整理し、常備兵の制度を創設して、貴族の專横を抑へければ、佛軍益々振ひ、一千四百五十年にはノルマンディーを取りて、英人をカレーに追詰め、一千四百五十三年には、英國の宿將タルボットを破りてボルドーを奪ひ、ギエンヌ全州を恢復するに至りき。是より英人は亦た一人の戦を唱ふる者なく、エドワード三世及びヘンリー五世が遺業を繼かにカレーの一地點に留めて、前後百年に互りし兩國の抗争も自ら爰に終局を告ぐるること、はなりぬ。

第七章 薔薇戦争

王妃マルゲリート英國を内亂の渦中に投ず

百年戦争の終局後英國に於てはヨオク家とランカスター家との間に王位の争起り、延いて内亂となり、三十年の間(一四五五—一四八五)其慘禍を逞うせり。此時ランカスター家の黨與は紅薔薇を以て徽章とし、ヨオク家の黨與は白薔薇を以て徽章とせしかば、世に之を「薔薇戦争」と呼べり。今其次第を尋ぬるに、是より先、英王ヘンリー六世は、父王ヘンリー五世の死後、生れて纔か

に九ヶ月にして英佛兩國の王位に登りければ、先王の遺詔によりてベッドフォード公は佛の攝政となり、グロースター公は英國の攝政となりて相共に王を補けしが、王は長ずるに及び羸弱にして終には狂疾を發し、殆ど政事を見るに堪へざること多かりけり。さる程に佛蘭西に於ては、オルレヤンの包圍不成功に終りし以來英軍は連戰連敗して、其勢力年と共に萎靡し、特にも一千四百三十五年攝政ベッドフォードの死後は、大陸に於ける英領の地相次いで敵の侵略を蒙るに至りければ、一千四百四十四年兩國の間に斡旋する者ありて二年間の休戰を約し、アンジューのマルゲリートを容れて王妃となしぬ。マルゲリートはアンジュー公ルネーの女にして、夙に才色兼備の聞えあり、一千四百四十五年齒十七歳にて、英國に來りしが、元來男勝りの婦人なりしかば、爾來サフオーク公ソマーセット公等と相結びて、柔弱なる王を左右し、佛國に對する軟弱なる政策によりて深く國民の反感を買へるのみならず、是より英國の宮廷をして黨争の渦中に投ぜしめぬ。初め攝政グロースターはマルゲリートの迎立に反對し、別に勸むる所ありしも終に用ひられざりしが、マルゲリートは爾來深く之を心に含み、宮中に黨與を作りて事毎にグロースターの政策に反對せり。後幾くもなくグロースターは反逆罪を以て審問に附せられ、尋いで獄中に死

しけるが、是れ全くマルゲリート黨の陰謀によれるなりき。爾後サフオーク公は王妃を擁して政權を擅にし、其私心を充たさんが爲に、ヨオク公リチャードを佛國より召還し、一味のソマーセット公を以て之に代へけるが、一千四百五十年ソマーセット公の失計によりて、ノルマンディーの全州佛人の手に落つるに及び、國民の憤怒一時に勃發し、サフオーク公は遂に國會の彈劾に會ひて失脚し、大陸に亡命せんとせる途上捕へられて殺されぬ。幾くもなくソマーセット公佛國より歸り、サフオーク公に代りて政柄を握り、王妃の寵眷を恃みて威權を宮中に擅まにしければ、ヨオク公は人民の後援を得て之と相對抗せり。

ランカスター、ヨオク兩家互に王位を争ふ

抑、ヨオク公リチャードは、其母系に於てエドワード三世の第二子ライオネルの裔に當り、其家格は、エドワード三世の第三子なるランカスター公ジャンの系統を引けるランカスター家に優りたれば、リチャードは平生之を以て誇となしけるが、曩にベッドフォード公の後を襲つて佛國の軍を督するに當り、故なくソマーセット公の爲に其職を奪はねければ、爾來怏々として心に不平を

抱き、私かに風雲の機を窺ひけり。然るに一千四百五十四年王は狂疾を發して、事を視るに堪へざりしかば、國會はヨオク公を國保に擧げて國政を攝せしめき。是に於て公はノルマンディーの失墜と官金私消の罪を鳴らし、ソマーセット公を捕へて獄に下しけるが、翌年王の病癒ゆるに及び、ヨオク公を黜けて再びソマーセット公を登庸せしかば、ヨオク公は遂に君側の姦を除くを名として兵を起しぬ。爾來ヨオク、ランカスター兩黨の爭相結んで解けず、ヨオク黨はセントを根據として、人民を身方とし、ランカスター黨は北方の諸侯を身方として、貴族の間に勢力を占め、互に勝敗ありき。戰の初年に於てヨオク公はランカスター黨をセント・オルバンスに破りてソマーセット公を殺し、ヘンリー六世を虜にして倫敦に入り、再び國保となりて政權を握りけるが、幾くもなく戰端また開け、一千四百六十年王師再び敗績して王はヨオク黨の手に虜となり王妃マルゲリートは王子エドワードと共に蘇格蘭に奔りぬ。是に於てヨオク公は議會を召集して王位に對する要求を提出しければ、議會は「ヘンリー六世の死後は位をヨオク公に傳ふべし」と決議し、之を全國に宣布せり。然るに王妃マルゲリートは、蘇格蘭に在りて兵を集め、此年十二月ヨオク公の兵をウエークフィールドに破り、公を虜となして其首を刎ね、之に紙の王冠を被らしめてヨオクの市門に梟しぬ。マルゲリートは勝に乗じて倫敦に向ひ、途にウォリック伯の軍を破りて、王を其手に奪ひ還したれど、英國の民は佛領の喪失を以て王妃の罪に歸して深く之を憎みければ、南方の民は擧つてヨオク公の長子エドワードを援け、之を倫敦に迎へたり。エドワードは乃ちウォリック伯と勢を合せて北軍に迫り、一千四百六十一年トウトン・フィールドの戰に於て敵の全軍を撃破し、北軍の死する者二萬を超えければ、王妃は王及び王子を奉じて、再び蘇格蘭に入りぬ。是に於てエドワードは倫敦に凱旋し、六月二十九日議會の推戴を受けて王位に登り、エドワード四世(一四六一—一四八三)と稱す。これをヨオク王統の祖とす。

「國王製造者」ウォリック伯
ランカスター、ヨオク兩家の争に際し、終始最も重要な地位を占めたるは、ランカスター側に於ては王妃マルゲリートにして、ヨオク側に於てはウォリック伯ネギルなりき。ウォリック伯は當時富強を以て國內に雄視せる大諸侯にして其領内には三萬の民を有し、倫敦に來る毎に六百人の從者に其家の紋章を顯はせる緋の上衣を纏はしめ、又一回の食事に六頭の牡牛を屠るを例とせ

争戰激甚 章七第

り。然るにヨオク公リチャードの妃は、ウォリック伯の妹に當りければ、戦争の初年より伯は常にヨオク家を援け、遂にヨオク家をして王位を得せしむるに至りければ、世人渾名して「國王製造人」と呼び囃しぬ。然るにエドワード四世は即位後ランカスター黨の一貴族の寡婦なるエリザベス・ウツドギルに眷戀し、一千四百六十四年終にエリザベスを立て、妃とし、爾來其一門を寵用してウォリック伯を疎んずるに至りしかば、伯は一女をエドワード四世の弟クラレンス公に嫁し更に他の一女をマルゲリートの子エドワードに嫁して、ランカスターの殘黨を身方となし、一千四百七十年一度エドワード四世を逐ひて、ヘンリー六世を位に復して、自ら政權を握りぬ。然るに翌年の初めエドワード四世は、ブルゴニエ公の援を借りて英國に上陸し、ウォリック伯とバーネットに戦ひて之を殺し、尋いでマルゲリート及び王子エドワードをも牛擒し、エドワードを殺し、マルゲリートを獄に下しぬ。幾くもなく廢王ヘンリー六世は倫敦塔中に暗殺せられしも、王妃マルゲリートは五年の幽囚の後佛王の爲に贖はれて國に歸り、餘生を憂愁の中に送りけり。

薔薇戦争の終局

エドワード四世は一千四百八十三年に逝り、王子エドワード十二歳にして位に登りしが、先王の弟グロスター公リチャード異心を抱き、王及び王弟ヨオク公リチャードを捕へて之を幽し、後窃かに人をして二甥を殺さしめき。此際リチャードは其黨與をして故らにエドワード四世とエリザベスとの結婚の正當ならざることを理由として、幼王の登位を非難せしめ、遂に一味の議員の推戴を受けて自ら王位に登り、リチャード三世（一四八三—一四八五）と稱しぬ。リチャード三世は即位後貨財を散じて上下の歡心を買ひ、偏に人心を收攬せんと力めたれど、程なく幼王兄弟が王の毒手に罹りて非業の死を遂げしこと顯る、に及び、貴族も人民も舉げて其不義不信を憎まざるはなく、一千四百八十五年リッチモンド伯ヘンリー・チュードアが佛王の助を得て、ウェールズに上陸するや、國內の貴族皆心を之に寄せ、王に背く者多かりしかば、八月二十二日ボスワルスの一戦に王軍大敗して、王も亦亂軍の中に戦死したり。此役王は兜の上に王冠を戴きて軍を臨みけるが、其死後王冠は落ちて草叢の中に在りしを、一人の武士之を拾ひてリッチモンド伯の頭上に加へけり。リッチモンド伯は、ヘンリー五世の妃カトリンがウェールズの貴族オーエン・チュードアに再嫁して生みたるエドモンド・チュードアの子にして、其母はソマーセット公の女なりしかば、

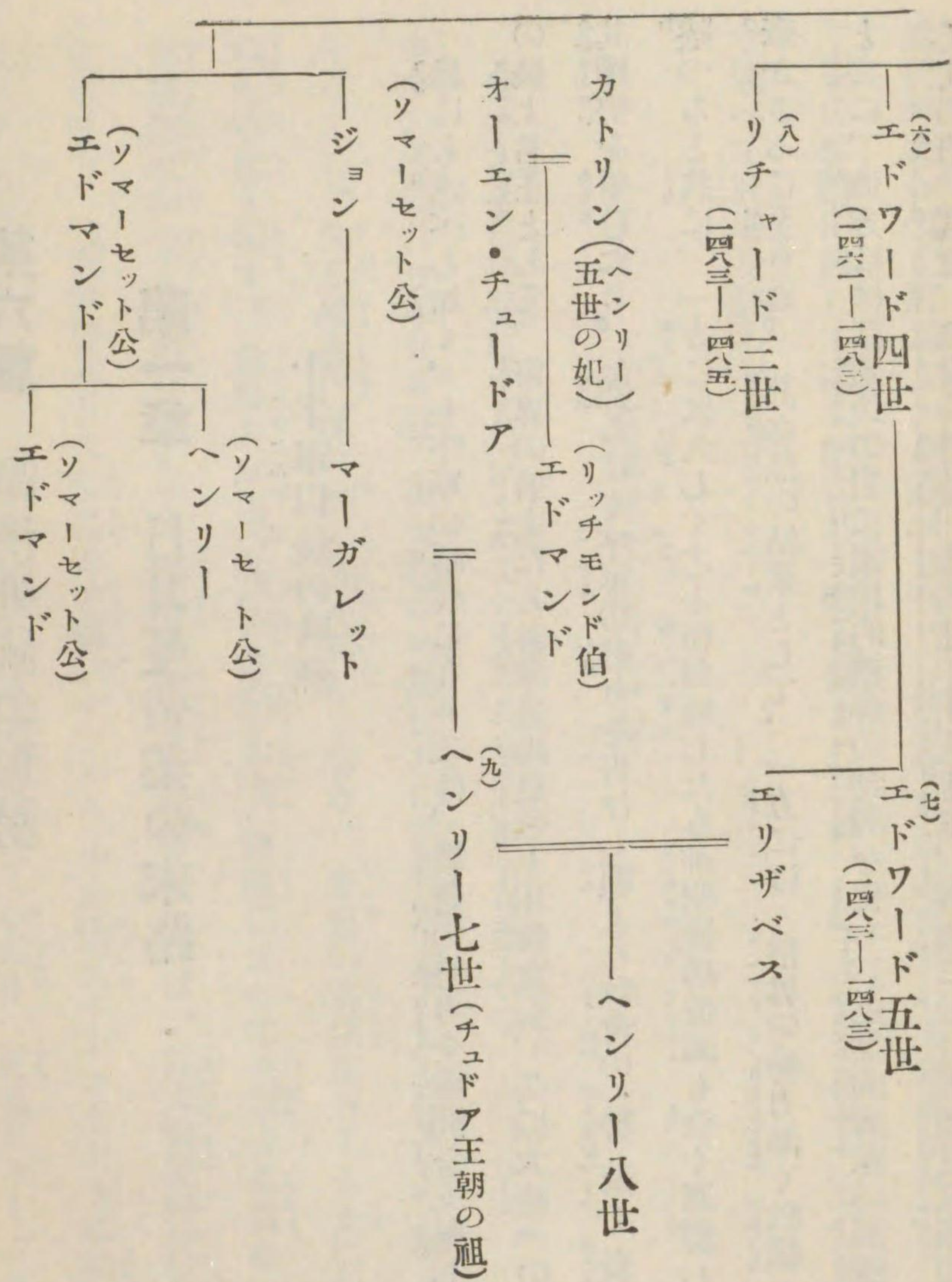
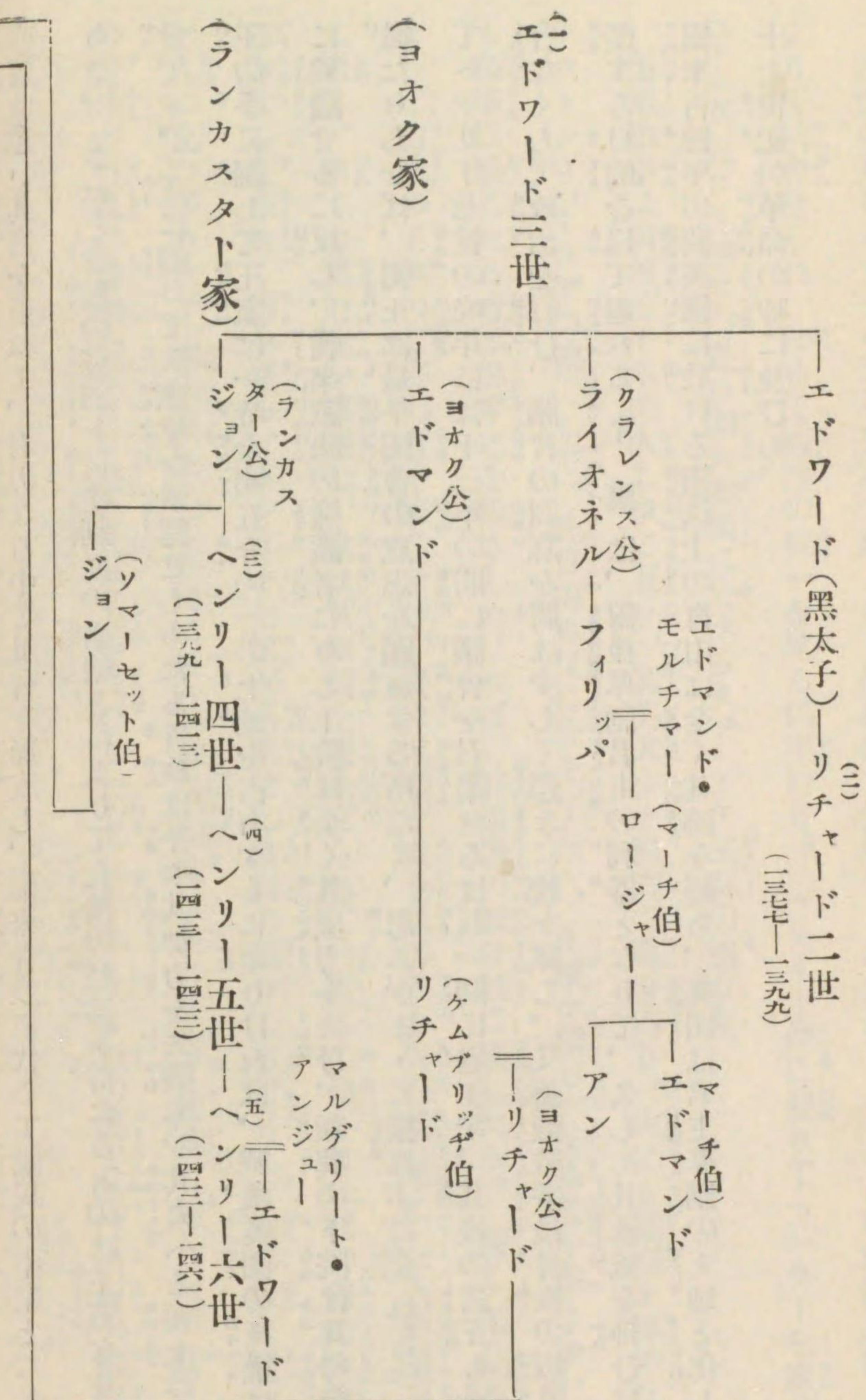
ヘンリーは其母系に於てランカスター家の血脈を傳へたり。然るに戦勝後ヘンリーはエドワード四世の長女エリザベスを娶りて妃となしければ、爰にランカスター、ヨーク兩家は王の一身によりて結合せられ、初めて國內の統一を見るに至れり。ヘンリー位に登りてヘンリー七世(二四八五—一五〇九)と稱す、是れ即ち英國に於けるチュードア王朝の祖なり。

薔薇戦争は前後三十年の久しきに亙り、其間大小十四回の戦争あり、中にも猛烈を極めたるはトウトンフィールドの戦にして、此日兩軍互に令を下して、生獲を禁じ、又降者を赦さず、苟くも敵軍に屬したる者は必ず之を殺さしめければ、其慘憺の狀言語に絶したり。斯くて此内亂によりて古來の王族の亡びし者十家に及び、貴族は殆ど其全數の半を失ひ又幸にして、戰場を免れし者も、多くは其財産を蕩盡し、或は其所領を沒收せられて外國に亡命しければ、爾後英國には有力なる貴族全く跡を絶ち、ヘンリー七世が召集せし最初の議會に出席せし貴族の數は纔かに三十人に充たざりき。其結果として英國に於ける封建制度は是より全く壊滅に歸しぬ。斯く英國の貴族が内亂の慘禍を蒙りて終に其勢力を失ひし一方に於て、大多數の農民及び市民の階級は多く之に與らざりしのみならず、此戦亂の間に在りても英國の商工業は年々共に繁榮を致しければ

商賈は愈々其富を重ねて、有力なる中等社會を形成し、爾來貴族に代りて國民の中堅となるに至りき。されど貴族の衰弱と封建制度の崩壊とによりて直接の利益を得たるものは王室なりき。

會てジョン王に迫りて大憲章を承認せしめたる貴族は今や其勢力を失墜し、其失へる領土は再び王の手に歸して王室は一時全國五分の一の土地を占有するに至りければ、戦後英國の王權は俄かに興隆せるに反し、從來憲法の擁護者たりし上院は全く其威力を失ひ、新興の下院は其勢尙ほ微びたりしかば、國王は最早國會の意志を顧慮する所なく、思ふがままに振舞ふに至れり。斯くてヘンリー七世の晩年には十三年の間に議會を召集せるは只一回に過ぎず、其後の諸王も屢々議會なくして政治を行ひ、議會の同意を問はずして恣に税を課し、又薔薇戦争後貴族の叛亂を防禦する目的を以て起れる星廳は、爾後專制君主の利器となりて、久しく其暴威を揮ひければ爾來百餘年の間英國に於ける憲法上の自由は全く其跡を絶ち、英國は君主專制の天地と化して、十七世紀の革命の時に及びぬ。

〔薔薇戦争中の英王世系〕



第六篇 歐洲列國の形勢

第一章 日耳曼帝業の末路

十字軍以後の歐洲

曩にも述べし如く、十字軍の時代に在りては、教會の勢力全歐洲を支配し、羅馬法王は精神界の最上君主として、俗界の君主たる神聖羅馬皇帝と相對立し、共に大統一の理想を抱きて、互に其權勢を争ひたり。然るに十字軍の終りを告げし頃より教會の勢漸く衰へ、法王の權威地に墜つると共に、一方には久しく之と相對峙したる神聖羅馬帝國も全く凋萎して最早世人の注意を牽かざるに至りぬ。其必然の結果として、一方には俗界の勢力漸く教權を壓するの勢を示すと共に、他方には諸國民の間に國民的精神の勃興を促し、近世的國家の基礎も漸く成りぬ。而して市府の獨立、商業の發達、羅馬法の研究等は、各國に於ける國民文學の生成と相須つて、新

時代の來りつ、あることを標示せり。此十字軍以後に於ける過渡時代の一大事件たりし英佛兩王國の爭覇に關しては、既に其大體を語りたれば、以下少しく中世の後半期に於ける列國の形勢を述べて此卷を終るべし。

大空位時代の日耳曼

先づ之を日耳曼に見るに、是より先、一千二百五十年皇帝フリードリッヒ二世崩じて後、從來皇帝の所領たりし日耳曼、伊太利の兩國は共に其元首を失ひ、伊太利の如きは漸く分離減裂に陥らんとし、日耳曼國內はた稍、趣を同じうせり。帝位の空虚なりしと正に二十三年、之を世に大空位時代と稱す。當時日耳曼の諸市は商工業の興隆によりて次第に富強を致したれど、一方には封建制度尙全く廢頽せずして、幾分か勢力を維持せしかば、此大空位時代は實に擾亂患難の時代なりき。一千二百五十六年迄は波蘭のウイヘルム法王インノケントに擁立せられて、日耳曼皇帝の名稱を有したりしが、司選侯等は賄賂を得て心動き、更にフリードリッヒ赤髯帝の玄孫カスチラのアルフォンソ十世を推選して帝と崇め、且つ之と同時に他の司選侯は之を排して英王ジョ

ンの子コオンヤール伯リチャードを選びて帝となしぬ。但し二帝共に帝の名のみありて實權なかりき。蓋しライン河畔を領せる四人の司選侯を初とし、其他の公伯ら擅に皇帝領を分割して自家の者の如くしたればなりき。次いで一千二百六十八年にはスワビヤ及びフランコニヤの公領分割せられ、又是より先、サクソニヤの分取せられしなどによりて、數多の小君主幾人となき興起するに至りぬ。而して帝國內の大諸侯の中丁抹、波蘭及び匈牙利の諸王の如きは、悉く皇帝の威權を奉ぜず、皆獨立して一國をなせり。是に於て乎、私闘は到る所に行はれ、諸侯は猶公盜の如く、常に其居城より突出して商人又は旅人を脅かし、直接帝國に關係ある皇族及び貴族さへも各、其領國に留りて己が欲する儘の政を施しぬ。

市府同盟の勃興

斯かる亂世の下に在りて、暴戾なる諸侯の凌虐を防ぐ必要より所謂市府の同盟なるもの起りぬ。抑、封建時代の初頃には、社會は只二種の階級より成りて、一方には貴族及僧侶あり、他方には農奴あるのみなりしが、十世紀の頃より此兩者の中間に立つべき第三級の發生を見るに至りき。

此變化は先づ市府の中に芽ざしたり。蓋し市民の智力漸く増加すると共に、獨立の精神爰に現れ初めしが爲なり。爾來數世紀の間、此平民階級の實力と特權とは、年を逐うて發達したり。當時諸方の都市には城壁の設ありて、市民らは其内部に在りて一身の安全を保ちけるが、是等市人の財力の愈、増加するに及び、商工互に協同して武器を備へ、自家の防衛に従事するに至り、更に進んでは領主より種々の特權を購ひて一種の自治體をなすに至りき。是れ中世の末期に及んで諸方に簇生せし所謂「自治市」の起源なり。斯くの如き市府は十字軍の時代より佛蘭西の南部及び伊太利に於て盛んに起りけるが、中にも日耳曼に於ては、ホーヘンスタウフ一家の滅亡後俄かに其數を増し、各、城壁を繞らして強族の暴虐を防げるのみならず、後には互に同盟して事に臨みて相救援する策を樹てにき。當時歐洲の貿易は主として北海及びバルト海の沿岸地方と地中海の海邊に於ける國々とに限られ、中にも十一世紀及び十二世紀頃には、亞弗利加の沿岸に於ける市府の貿易盛んにして、西班牙なる亞刺比亞人多く之に従ひ、富み且つ榮えたりき。當時歐洲の諸市中東方との貿易に相競争せしは、アル、マルセイイ、ニース、ジェノア、フローレンス、アマルフィ及びエニスなり。又エニスとジェノアとの中間なる伊太利の地方及び北

部歐羅巴に數多の繁盛なる市府ありき、ストラスブルクを始とし、アウグスブルク、ウルム、ラチスボン、ウィーン及びニュルムベルヒなどライン河畔の諸市も亦其中にありき。是等の市府を経て商業の流れは、北より南、南より北と互に相通じたり。市府の同盟は自然に其利害を一にする是等の諸市の間に起りしものにして、其内最も著名なるものをハンザ同盟、ライン同盟、スワビヤ同盟等とす。中にもハンザ同盟は最も大にして、其強盛なりし時に於ては、其同盟の下に集りし市府の數八十五の多きに達し、リユーベックを中心として其權威北歐に振へり。此同盟は十三世紀の中頃リユーベック、ハンブルグなどの附近に起れる防禦同盟より始まりしものなるが十四世紀に入りて是等諸市の同盟は、合同して一大同盟を組織し、バルト海沿岸並にライン河畔の諸市及びフランドル地方の大市府をも其管下に集め、之をリユーベック、ケルン、ブルンスウィク、ダンチッヒの四市を中心とせる四區に分ち、リユーベックを以て盟主とし、又ブリュージュ、倫敦、ベルゲン及びノブゴロッドの四市を外國貿易の要港と定めて、爰には商館を設け、常に其商船を碇泊せしめき。斯くて此同盟は憲法を制定し、共同の財産及び共同の海陸軍を備へ、共通の貨幣を作り、度量衡の制を一定し、又相互の爭議を裁決せんが爲に仲裁裁判の制度を設けたり。

されば此同盟の盛時に在りては、皇帝を始め各國君主の干渉を離れ、陰然獨立なる共和國の觀をなし、十四世紀の後半には丁抹王と戦端を開きて、其首都を占領するに至り、北日耳曼に於ける漁業、鑛山業、農業及び製造業を擧げて其手に收め、又露西亞、英吉利、ネーデルランドの諸國より種々の特權をも與へられたれば、其貿易の通路に當れる主なる市府に於ては、到る所「ハンザ同盟」の旗章其勘定所の屋頭に翻り、伊太利以北に於ける全歐羅巴の商權は殆んど悉く彼等の壟斷する所となれり。されど十五世紀の末よりさしも盛なりし同盟諸市の勢力も、種々の事情によりて漸く衰頽を來し、十七世紀の中葉に至り遂に解散の悲運を見るに至れり。ライン同盟はライン河畔に於ける六十の市邑及びマインツ、トリエル、ケルンの三大主教の同盟によりて起りし者にて、同盟諸市は三ヶ月毎に議會を開き、大に護民の新法を制定しぬ。又是等の市府同盟に對立せんが爲の小貴族の同盟も、ライン地方、スワビヤ地方などに起り、又各市の商人及び工人等各々組合を組織して盛んに自家の利源を開きぬ。扱又曩に十字軍とスラヴ人との戰爭に依つて大に人口を減少せし北部日耳曼の地方に於ては、フランドル人、和蘭人並にフリジヤ人等相競うて移住し來り、専ら職拓に従事せり。必竟するに、フリードリッヒ二世帝崩御後擾亂累年

に渡り、其間地方自治の願望盛に起り、終に一君政治の基礎を覆すに至りぬ。日耳曼帝國は此後終に大空位間に失ひし勢力を復すること能はざりき。

司選侯 恣に皇帝を易置す

一千二百七十二年コオンツールのリチャード死しければ、諸侯相議してハプスブルグ伯ロドルフ(一二七三—一二九二)を擧げて王となしぬ。是れ後の奥地利帝室ハプスブルグ家の始祖なり。當時日耳曼國內の亂離は殆ど其極に達しければ、國人亂を厭うて偏へに秩序の恢復を希望するに至れり。是より先日耳曼は數百年の間選舉王國の制を採用し、初めは僧俗大小の諸侯悉く王の選舉に與り、マインツの大主教特に選舉を總理するを例とせしが、其後選舉の權は何時ともなく少數の大諸侯の手に歸し、空位時代の頃には、マインツ、トリエル、ケルンの三大主教、ライン帝領伯、サクソニア公、ブランデンブルグ邊境伯、及びボヘミア王の七人にて、國王の選舉を專行することになりしかば、世に之を七司選侯と呼べり。此時七司選侯が渺たる一小貴族に過ぎざるハプスブルグ伯ロドルフを擧げて王となしたるは、其勢力の微弱にして、自己が意のま

まに操縱し得べしと思ひたるが爲なりき。ロドルフは爲人勇敢にして理義に敏く、且つ教會に對して順從なりしが故に、常に其應援と保護とを得たり。機敏なる帝は夙に伊太利の治め難きを知り、之を棄て、専ら日耳曼國內の擾亂を鎮定するとに力を盡しぬ。時にボヘミア王オットカル二世奥地利、スチリヤ、カリンチャ及びカルニオラの諸州を領して勢を振ひ、屢帝命に違背せしかば、帝は兵を出して之を討ち、一千二百七十八年ダニューブの左岸なるマルクフィールドに於て其軍を破り、オットカルを殺しぬ。此に於てか奥地利、スチリヤ、及びカルニオラの三州を以て王子アルベルトに與へ、カリンチャは妹婿なるチロル伯の采邑となしぬ。爾來ハプスブルグ家の權力漸く固し。其後帝は力を盡して次第に帝領を回復すべき策を講じ、又意を内政に注ぎ、自ら全國を巡遊して人民の害を除き、暴横なる貴族を抑制して、嚴に私闘並に公盜を禁じ、命を用ひざる者は容赦なく之を懲らし、多く其巢窟を毀ちて、國內治平の緒を開きぬ。

一千二百九十一年ロドルフ逝きければ、七司選侯の首領なるマインツの大主教ゲラルドは、金を散じて其從弟なるナツソー伯アドルフスを選ばしめき。アドルフス(一二九二—一二九八)は武に長じたれど性殘忍にして貧婪なりしかば、英王エドワード一世より百萬の資を受けて佛國を襲はん

とを約し、其金を以てチーリングヤの地を其侯アルベルトより買はんとして、諸侯の物議を招き、終に司選侯の爲に廢貶せられき。是に於て先帝の皇子奥地利公アルベルト一世(二九八一—三〇八)選はれて位に登りしが、王はボヘミヤを併せんとし、又司選侯の權を奪ひて、世襲王制を立てんとして共に失敗し、程なく其甥ヨハンの爲に暗殺せられき。ルクセンブルグ伯ハイナリッヒ七世(一三〇八一—一三二一)次いで帝となり、皇子ヨハンをボヘミヤ王オットカルの孫女に配してボヘミヤを併せぬ。斯て後帝は其の運命を試みるがために、アルプス山を越えて、伊太利に幸せしが、幸にも望み成りて、バギヤに於て伊太利王の位に登り、羅馬に至りて、恒例の如く皇帝の稱を得き。然るに幾ばくもなくして反對の黨派所々に蜂起し、佛國と同盟せる法王クレメント五世遂に帝を破門せしが後程なくて帝は崩じぬ。或はいふ聖餐の酒杯中に毒藥を加へてす、めたりしに因ると。實に一千三百十三年なり。帝爲人廉潔にして高尚の質なりしが、惜むらくは時勢を洞察すべき眼識なかりき。日耳曼が伊太利を統治すべき時代は今や全く過去たりしなり。ハイナリッヒ七世の後司選侯二派に分れ、其一派はアルベルト一世の皇子奥地利のフリードリッヒ(一三一四—一三四七)を推戴し、他の一派はバワリヤ公ルドキッヒ(一三二四—一三三〇)を推せり。此

に於てか内亂起り其勢猛烈にして十年の間繼續しぬ。一千三百二十二年ミュールドルフ近傍の大戦にて奥地利黨大敗し、フリードリッヒは敵の擒となりぬ。此際ルドキッヒが新勁敵法王ジョアン二十二世アギニオンに在りて、帝位を佛王フィリップ美麗に與へんとし、爾來皇帝と法王との爭相結んで解けざりしが、一千三百四十六年司選侯は終に帝を廢してボヘミヤ王ヨハンの子カール四世(一三四七—一三七八)を立て、帝となしぬ。帝は一千三百五十五年一度伊太利に赴きて帝冠を戴きたれど、歸來伊太利領有の念を斷ち、伊太利に於ける帝國の遺權を或は市邑に或は專制主に賣りて財本を得、以て自家の世襲領を擴張するに力めき。されば王の崩するや其世襲領の大なること實に北の方バルト海より南は殆どダニューブ河に至りけり。されど帝が一代の功績として傳ふべきは、一千三百五十六年「黄金文書」と稱せらる、法例を發布して、司選侯の權利を確認せし事なり。此法典は從來實行し來りながらも、表向の權利なかりし七人の司選侯に皇帝推選の權を許與せしものにして、全文二篇三十條より成れるものなりき。カール四世の死後皇子ウエントツェル(一三七八一—一四〇〇)帝位を襲ひしも、残忍粗暴にして、其治世中日耳曼國內は再び彼の空位時代の擾亂を現するに至りしかば、一千四百年司選侯の爲に廢

せられ、ライン帝領伯ルベルト(二四〇〇—二四二〇)代りて帝となりしが、其死するや、先帝の弟
ブランデンブルグ伯兼匈牙利王シギスムント(二四二〇—二四三七)選ばれて帝となりぬ。シギスム
ントは容姿秀麗にして辯舌に長じ、權謀に富みけるが、即位後私かに教會を刷新して、王威を振
はんと欲し、法王ジョアン十二世に迫りて、有名なるコンスタンツの宗教大會(二四二四—二四二八)
を開かしめき。彼の日耳曼改革派の先驅たるボヘミヤのヨハン・フースが異端の宣告を受けて、
其徒と共に焚刑に處せられたるは、此大會に於てなりき。フースの事に關しては、十六世紀に於
ける宗教改革の條下に敘すべければ、爰には之を略すること、なせり。

フースの死後其門徒は憤激して兵を擧げ、ジスカと呼べる一貴族を首領とし、一千四百二十年
大に王軍を破りて、之を國外に逐ひ、進んで近隣の諸州を劫掠し、勢猖獗を極めけるが、其後
バーゼルの宗教會議(二四三一—二四四九)に於てフース黨の溫和派との間に和議成り、之に四ヶ條の
特權を與ふること、なりぬ。されど其中の過激黨なるタボル派は尙ほ之に満足せずして、戰を
續けしが、數度の戰の後撲滅せられ、フース黨の叛亂漸くにして鎮定したり。
皇帝シギスムントの死後、ルクセンブルグ家の統絶え、其女婿たる奥地利家のアルベルト二世

(二四三八—二四四〇)再び帝位に即きけるが、爾後帝國瓦解の日に至るまで、日耳曼の帝位は永く奥
地利家の有となりぬ。

瑞西獨立の戰爭

瑞西國は元來アルル王國の一部なりしを、一千三十三三年の王國と共に日耳曼帝領中に編入
せられ、其國內には僧俗混淆の封建制度立てられたり。十二世紀の頃にはチューリッヒ、バーゼ
ル、ベルン及びフライベルヒの諸市貿易の中心となり、且つ自治市たる特權を得るに至りぬ。
中にもウリ、シュキーツ及びウンテルワルデンの三州は常に自由の精神を愛育せり。十三世紀の
初期以來ハプスブルグ伯代々此地に君臨しけるが、一千二百六十三年ハプスブルグ家のロドルフ
が選まれて皇帝となるや、諸州の中二州を公然日耳曼帝國の直隸となし、種々の特權を許して
國人を慰撫しけり。然るにロドルフ一世の崩するや、嗣帝アルベルトは先帝の時瑞西人に與へ
たる特權を奪ひ、此三州を奥地利に合せんとし、ゲスレル、ベリンゼルと呼べる二人の知事を遣
し、人民に壓迫を加へしめしかば、三州先づ同盟して獨立を企て、次第に瑞西同盟を皇張し、

遂に外國の羈絆を脱せんとして種々の戦亂を牽起しぬ。今其次第を尋ぬるに、初めゲスレルがウリ、シュキーツ二州の知事に任命せらるゝや、人民を威服せしめんが爲にウリの州内に一城を築き、兵を備へて虐政を施しければ、州内漸く不穩の形勢を表しぬ。ゲスレルは此狀を見て、更に不平の民を攝伏せしめんと欲し、一千三百七年、聖ヤコブ祭の前夜アルトルフの市場に於て、一帽を竿頭に懸け、人民に令して「汝等此帽を見ること尙ほ皇帝陛下に對するが如くせよ。苟も敬禮を缺く者あらば、其四肢を斷ち、其生命を奪ふべし」と告げしめけり。爰にウリ州の人にヴルテル・フルストと呼べる者ありて、シュキーツの人エルネル・スタウフアック及びウンテルヴルデンの人アルノルト・フォン・メルクタールと共に盟約を結びて、相共に奥地利の暴吏を逐はんと契り、一千三百七年の末ルツェルン湖邊なるリュトリの野に於て同志の友三十人を會して事を謀り、翌年の元旦を期して義兵を擧げんと約しぬ。此三十人の義士中にウィルヘルム・テルといへる者あり、アルトルフの近傍なるブルグレンの農夫なりしが、方正にして氣骨あり、夙に十字弓の名手として百發百中の響高かりき。一日テルは年齒僅かに六歳なる一子を携へてアルトルフの市場に至り、彼の帽の下を過りしも、敢て禮をなさざりしかば、捕吏の爲

に捕へられて、父子共にゲスレルの前に引かれたり。ゲスレル乃ちテルに向つて、「汝は十字弓の名手と聞及ぶ、今試に汝が兒の頭上に林檎を置きて的となさん、汝能く之を射落さば、汝が命を免すべし」と言ひければ、テルは此無法なる難題に胸を打たれて、頓には其命に従はんとせざりしも、「若し我命を拒まば汝のみならず、汝の兒をも殺すべし」と聞くに及び、竟に意を決して其命に従ひぬ。ゲスレルは臣下に命じてテルの兒を杖に縛せしめ、且つ兩手を以て其頭上に林檎を支へしめ、いざいとテルを促しければ、テルは心中に神を念じつゝ、靦を定めて兵と放つに、其矢過たず林檎を貫きければ、觀る者一齊に歡呼の聲を擧げたり。此時ゲスレルも覺えず讚歎しけるが、既にしてテルの腰間に尙ほ一條の矢の残れるを見咎め、「やよ、汝林檎を射るに一矢にして足れり、猶一矢を残せるは何故ぞ？」と罵り、テルが稍色を變じて答に窮せるを見て、益々訝り追窮するに急なりけり。是に於てテルも終に意を決して、「我れ若し第一矢を射損ぜし時は、汝を射て我兒の仇を報いんと欲せしなり」と臆せる氣色もなく答へければ、ゲスレル大に怒りて直ちにテルを縛せしめ、「今汝をして再び日月の光を見さらしめん」と言ひ、船を湖上に浮べ、自ら之を護送してキユスナクト城に向ひけり、然るに湖心に乗出せる頃暴風俄に起

り、船は今にも覆るべく見えければ、ゲスレルは餘儀なくテルの縛を解きて、舵を取らしめたり。テルは豫てより湖上の事に熟しければ、巧みに風を避けて船を岬ある處に漕ぎ寄せ、陸に近づくと見るや、俄に弓を執りて岸に躍り上り、林中に入りて、とある樹洞の中に潜み、やがてゲスレルの來るを覘ひて一矢の下に之を射殺しけり。

是に於て瑞西の民並び起つて奥地利人の守れる諸城を抜き悉く其守兵を逐ひ、一千三百八十八年一月六日、シユキーツのブルンネンに於て三州同盟の誓を固めたり。アルベルト帝は此報に接し、親ら軍を率ゐて、之が征討に向ひけるが、中途にして其甥の爲に弑せられぬ。それより七年を経て、アルヘルト一世の子奥地利公フリードリッヒ一萬五千の騎士を率ゐて、瑞西に入りたれど、瑞西人はモルガルテンの嶮路に據りて大に奥地利の軍を破り、フリードリッヒは纒かに身を以て逃れ歸りぬ。時に一千三百五十五年十一月十六日にして、世に之を「瑞西のマラソン役」と稱す。此に於て瑞西同盟彌々其版圖を擴張し、ルツェルン（一三三二年）チュールリッヒ及びグラルス（一三五一年）ツীগ（一三五二年）並にベルン（一三五三年）の諸州皆同盟に加はりぬ。其後一千三百八十六年同盟軍は再び奥地利公レオボルト三世の軍をセムパツハに邀へけるが、彼の瑞

西の英雄ギンケルリードのアルノルドが、奮進して敵に向ひ、自己の生命を犠牲として身方の爲に道を開き、以て大勝利を得きと傳ふるは此時の事なり。これより三年を経て瑞西人更にネーフェルスの地に於て三度奥地利軍を粉碎し、爾來全く奥地利の羈絆を脱して、永く獨立の實を享有するに至りき。

此獨立戰爭の間瑞西人は其山地を利用し、常に奥地利の重騎兵を悩ましけるが、斯く訓練なき農民軍を以て百練の精兵を破れる所以は、瑞西人が其長槍隊とハレバルドと呼べる新武器とを巧みに用ひたるに原けり。ハレバルドといふは斧と槍とを兼ねたるが如きものなるが、瑞西人は先づ長槍隊を先頭に出して敵の騎兵に當らしめ、敵の陣形の亂るゝを待ちて後列なるハレバルド隊を縦ち、或は其槍先を以て敵の馬を突き、或は鉤を以て馬上の甲武者を引落し、斧を揮つて之を粉碎するを慣用手段として、戦ふ毎に敵を破り、斯くて中世の戦術に一新紀元を開くに至りき。

第二章 群雄割據の伊太利

兩黨の争 半島を擾亂す

伊太利に於ては、曩に法王と皇帝との葛藤相結んで解けざりし間、國內は常に争亂の巷となりけるが、今や此二勢力の漸く沈衰するに及びても、國內の統一容易に成らず、國人互に黨を樹て相争ふこと愈甚しきに至りぬ。實に伊太利の大敵は外國の干渉と國內の黨争なりき。是より先フリードリッヒ二世の崩するや、其後嗣と法王との間に戦争十七年間に及びけるが、一千二百二十六年マンフレッドの敗北後、ホーヘンスタウフェン家の最後の王コンラデン捕へられてナポリ(ネープルス)灣頭の露と消え、兩シチリヤの王冠はアンジュー伯シャルルの頭上に落ちけるが、尋いで「晩禱の變」ありてシチリヤは全くシャルルの手中より脱し、一千二百八十二年以後截然ナポリより分たれて遂に西班牙なるアラゴン家の所有となりぬ。又法王領はハプスブルグのロドルフが日耳曼王に選ばれし以來は、全く法王管下の獨立州となり、ゲルフ黨(法王黨)とギベリ

ン黨(皇帝黨)との争は愈々激烈を加へ、其餘波遂に伊太利の諸市に及びぬ。ゲルフ黨なるジェノヴ(ジェノヴァ)人は一千二百八十四年ピサ人を破り、同じくゲルフ黨なるフィレンツェ(フロレンス)も次第に勢力を得き。尋いでジェノヴとエネチャ(エニス)とは地中海の支配權を争ひて互に相軋し、フィレンツェには、ネリ黨(黑黨)及びビヤンキ黨(白黨)といふ新黨派現れき。爾來兩黨の勢互ひに隆替ありしも、既にして法王が佛王の左右する所となりて、一千二百九十年其座をアギニオンに移せし以來、約七十年の間伊太利少しく平穩にして兩黨双つながら國を害ふこと尠かりき。要するに此等争亂は其名義は法王黨と皇帝黨との争鬭なるが如しと雖も、其實ゲルフ黨は封建制度を破壊して、商業并に共和政體を創設せん事に力を注ぎ、ギベリン黨は之に反して無政府の弊を恐るゝの餘り、飽までも新制度の輸入に抗せしものなり。彼の大詩人ダンテが不朽の大叙事詩をものしたるは此時代にして、正に是ゲルフ、ギベリン兩黨の争の最も閑なりし時なり。

伊太利最大の詩人ダンテと其「神曲」

ダンテ・アリギエリはフィレンツェの貴族の出にして、一千二百六十五年に生れたり。幼時より名ある學者に就きて教育を受け、夙にウエルギリウス（ワージル）を初め、拉甸文學の蘊奥を極めたるのみならず、當代の神學及び哲學に至るまで通曉せずといふことなかりき。其家は元來ゲルフ黨に屬せしも、其後白、黒兩黨の紛争起るや、ダンテは白黨に與して、次第にギベリン黨に傾き、一時はフィレンツェの副長に推されたれど、一千三百二年敵黨の政權を握るに及び、亡命して伊太利の諸市を流寓すること前後十九年、終に再び故郷の土を履むに及ばずして、一千三百二十一年ラエンナに客死したり。彼れが不朽の傑作と讃へらる、「神曲」は、作者が地獄界淨罪界、天界の三界を巡遊せることを敘し、其幻影に託して、社會人生に對する自己の理想を描けるものなりき。ダンテは先づ地獄に降りて、古今の名ある人々が、其犯せる罪によりて地獄の苛責を受くるの状を目撃し、淨罪界に入りては、美しき星光の下に多くの人々が各、其救濟の彼岸を望みつゝ、贖罪の苦行を積むを眺め、最後に天界を遍歴りて終に聖母マリヤの前に跪き、神の靈光に浴して、世界は只神の愛によりて光被せらるゝとを悟りぬ。初の二部に於ては、古羅馬の詩人ウエルギリウスを導師とし、後の一部に於ては其意中の少女たるベアトリチエを手引とせり。ウエルギリウスは彼が私淑せる詩人にして、ベアトリチエは彼れが幼時よりの戀人なりき。美しき南歐の五朔の祭の日、詩人はゆくりなくも此少女に會ひて、忽ちあやしき愛着の羈に繋がれけり。此時ダンテは尙ほ九歳の幼童にして、少女は彼れよりも一歳の妹なりしが、爾來ベアトリチエは、詩人が聖なる戀の宿となりぬ。後ベアトリチエは一度他に嫁して幾くもなく二十四歳にして逝り、ダンテも亦妻を迎へたれど、彼れは終生其心を易へず、ベアトリチエは聖なる愛の化身として常に彼れが心に宿りぬ。ダンテは一度「新生」の一篇に於て此古今に比類なき戀の思ひ出を語りたるが、今「神曲」に於ても天界の旅に於て彼れを導きし者は、此愛の手に外ならざりしなり。「神曲」は實に中世紀の産出せる最高最大の文學なるのみならず、一面に於ては中世の精神的生活を代表せるものなりき。一篇の精神は罪惡の解脱と天國の獲得とにあり。而して爰に到るの道は、只無限の苦痛を忍び、貴き愛の力に導かれて、廣大無邊なる神の榮光に觸るるにあり。既に故郷を逐はれ、現世に於て失意の人となれるダンテは、最早救濟を現世に望まずして、寧ろ之を未來に求めき。されば其愛國の熱情は、やがて迸りて當代の墮落に對する猛烈なる呪咀の聲となり、其伊太利の社會に對するや、虛偽を發き、腐敗を剔抉して一毫も假借す

せり。ウエルギリウスは彼が私淑せる詩人にして、ベアトリチエは彼れが幼時よりの戀人なりき。美しき南歐の五朔の祭の日、詩人はゆくりなくも此少女に會ひて、忽ちあやしき愛着の羈に繋がれけり。此時ダンテは尙ほ九歳の幼童にして、少女は彼れよりも一歳の妹なりしが、爾來ベアトリチエは、詩人が聖なる戀の宿となりぬ。後ベアトリチエは一度他に嫁して幾くもなく二十四歳にして逝り、ダンテも亦妻を迎へたれど、彼れは終生其心を易へず、ベアトリチエは聖なる愛の化身として常に彼れが心に宿りぬ。ダンテは一度「新生」の一篇に於て此古今に比類なき戀の思ひ出を語りたるが、今「神曲」に於ても天界の旅に於て彼れを導きし者は、此愛の手に外ならざりしなり。「神曲」は實に中世紀の産出せる最高最大の文學なるのみならず、一面に於ては中世の精神的生活を代表せるものなりき。一篇の精神は罪惡の解脱と天國の獲得とにあり。而して爰に到るの道は、只無限の苦痛を忍び、貴き愛の力に導かれて、廣大無邊なる神の榮光に觸るるにあり。既に故郷を逐はれ、現世に於て失意の人となれるダンテは、最早救濟を現世に望まずして、寧ろ之を未來に求めき。されば其愛國の熱情は、やがて迸りて當代の墮落に對する猛烈なる呪咀の聲となり、其伊太利の社會に對するや、虛偽を發き、腐敗を剔抉して一毫も假借す

る所なく、教會を呪ひ、法王を罵り、寧ろ思ひを過去に趨せて古羅馬の帝政を憧憬するに至りき。彼が法王黨より遂に皇帝黨に轉じたるは、要するに教會の腐敗に望を絶ち、寧ろ皇帝の威力によりて伊太利の統一と平和とを恢復し、望むべくば古羅馬の光榮を再現せんとせしが爲なりしなり。

僭主と傭兵の將

ゲルフ、ギベリン兩黨の争擾に依り、古來の貴族は多く亡び、以前權力を有せざりし平民の階級之に代りて頗る權力を有するに至りぬ。市人等は工商の組合を組織して、次第に自治市制の基礎を堅め、組合の頭領たる總長及び副長は、從來の執政官に代り、市長の職權を局限して専ら司法事務にのみ限ること、なしぬ。又ゲルフ派の諸市に於ては、貴族の勢力を抑へん爲に一の職を設け、これを「正義の旗手」と名けしが、フイレントツエにては、更に二十人の副旗手を置き、其下に隸屬せしめき。當時是等の市府には、それ々民軍の將ありて専ら戰鬥に従事せり。此等は皆軍務に熟達せる人々にして、其中には往々貴族の出にして市民となれるものもありき。此の如くして北部伊太利の諸市にはいつしか亦世襲將軍家といふもの起るに至りぬ。ミラノの

ギスコンチ、エロナのスカラ、ラエンナのボレンタ等是なり。トスカナ（タスカニー）地方にはフイレントツエの商權頗る大なりしかば、其諸市は久しく門閥の支配を受けざりしも、尙ほ往名聲ある將軍の爲に自由を奪はれんとする傾のなかりしにはあらず。斯くて十四世紀の初め、内亂や、靜平に歸するや、是等の將軍は日耳曼の勢力を伊太利以外に驅逐して、其市の獨立を成就せる功を恃みて漸く勢を振ひ、さながら專制君主の權を握りぬ。是に於てミラノを始めとして、ロムバルヂヤには、是等僭主の支配の下に、數多の小獨立國起りトスカナにはフイレントツエを代表者として自由共和國の組織行はれ、エネチヤには貴族的共和政治行はれたり。而して中部伊太利には別に法王領あり。南方にはナポリ王國あり、是等の小邦互に相對峙して、覇を争ひければ、爾後百餘年の間伊太利は引續きて戰國の狀態を現じたり。而して此間に「冒險隊」と呼ばれたる傭兵の制起りぬ。蓋し各地の市民は已に貴族を倒して、其獨立を得たりしかば、再び其武器を放棄して、製造貿易の業にのみ従事し、亦兵戰の事を顧んともせざりき。此に於てか僭主も共和政府も、外國の冒險者を備ひ入れて之を使用するを便となしければ、此等傭兵は自ら「自由隊」と稱して全國に跋扈したり。是實に全國に患害をなせし



者にして、其首領を「コンドッチエリ」と呼び、後には其武力を擁して此時代の實權を掌握するに至りき。此頃より戦争は卑怯なる權謀術數と化し、血を流さずして勝を得んことを主眼とせしかば、士氣次第に衰耗し、隨うて陰謀詭計盛に政治上に行はれき。此等首領の一人にスフォルツァ・アッテンドロといふものありしが、後に其子フランチェスコはミラノ公となりぬ。

内亂後に起れる新勢力

斯の如く伊太利の半島は久しく群雄割據の状態を續け、其不統一なること日耳曼よりも一層甚しき程なりしが、十五世紀の中頃に及び、前百五十年間の變革の結果として、稍固定したる五つの主要なる邦國を見るに至りき。所謂五國とはナポリ王國、ミラノ公國、フィレンツ共和國、エネチヤ共和國及び法王領是なり。此五國の史各、語るべき事跡からず、左に其二三を敘すべし。ナポリ王國は、アンジュー伯シャルのホーヘンスタウフェン家に代りて王となりし以來、久しくアンジュー家の支配に歸しけるが、ジャンヌ二世（一四二四—一四三四）に至りて其統絶え、アラゴン王アルフォンソ五世（一四三五—一四五八）其後を承けて、シチリヤ、ナポリ兩王國を併せ、二十三年

間平和の治をなしぬ。されど西班牙、佛蘭西兩國の確執は爰に萌し、終に近世史の初期を充せる伊太利戦争を誘致するに至りき。

ミラノ市は夙にロンバルヂヤ諸市の盟主として、共和政府を組織し來りしが、其後ギスコンチ家漸く勢を占め、大主教ジャンに至りて、自らロンバルヂヤ諸市の盟主となりしが、其甥の子なるジャン・ガレアゾー・ギスコンチは一千三百八十五年終にミラノの僭主となり、更に進んでロンバルヂヤの大部を蠶食し、且つ皇帝に獻金して、ミラノ公の稱號を許されたり。ジャン・ガレアゾーは伊太利王國の建設を夢想したれど、其死するや、一朝にして全領土崩瓦解し、其治下にありし傭兵の將先づ叛き、一千四百四十七年に至り、フランチェスコ・スフォルツァ、エネチヤ人の應援を得てミラノ公となり、其族五十年間該地の政柄を握りけり。

エネチヤの繁榮は十字軍の時に始まり。元來エネチヤは東西貿易の衝に當りければ、夙に航海術に長じけるが、十字軍起るに及び、其市民は兵士糧食の運搬を請負ひて俄かに巨富を致せるのみならず、歸路は東方の香料、寶石の類を載せ來り、これにても多くの利益を得たり。爾來ジェノワと相競争して東方の貿易を專擅し、又絹布、硝子などの製造業を以ても其名を知られた

り。一千百七十二年以來四百八十人の議員より成れる大議會ありて、統領其他の官吏を選
舉せしが、其後次第に變遷して、一千二百九十七年に至り、憲法を改正して純然たる貴族寡頭政
體となりぬ。爾來議會は少數門閥家の專有となり、又一千三百十一年には十人議會といふもの
創設せられ、政府に對して陰謀を企つる者あれば、直ちに檢舉して祕密に裁判し、或は人知れず
之を殺し、或は水底に設けたる暗室に幽閉せり。元來エネチヤは伊太利の本土には領土を有せざ
りしも、ダルマチャ、イストリヤを始め、多島海の諸島を領して、アドリヤ海の主權を握り、東
方との貿易に満足しければ、敢て伊太利國內に於て威權を振はんとせることなかりき。然るに
一千三百五十二年以來ジエノヴとの間に紛争を生じ、其争三十年に互りけるが、エネチヤ人は終に
ジエノヴの海軍を壓倒し、一千四百年にはエロナ、ギチエンザ及びパドワの諸市を其領土に加へ
たり。尋いで西班牙葡萄牙の勃興によりて、其海上の利權を侵蝕せられ、更に土耳其人の西漸
に會ひて次第に多島海の領土を蠶食せられたる結果、轉じて眼を半島に注ぐに至り、一千四百五
十七年迄統領たりしフランチェスコ・フォスカリの時には、エネチヤは盛んに伊太利の事に干渉し、
半島に於て地歩を占むるに至りき。

フィレンツェも亦中世の間製造貿易を以て天下に鳴り、其製造に係る絹布、毛織物及び寶石類
は廣く西歐の諸國に散布せしのみならず、市民は銀行業を以て其名を知られ、一千二百五十二年
に初めて鑄造せる「フロリン」と名くる金貨は全歐に播布して通貨の本位となりき。當時是等商
賈の間より起りてフィレンツェの政權を擅にせるはメヂチ家と呼べる豪族なりき。其家の一人
にてサルヴェストロ・メヂチといへるは、一千三百七十三年、自ら民黨を率ゐて古來の貴族黨と争
ひて之を破り、其名聲を高めたり。實にフィレンツェの歴史中最も光榮ある時期は、此民政
黨の勝利を以て開かれたるなりき。爾來メヂチ家は世々フィレンツェの政權を握りて、共和政體
の名の下に、獨裁君主の權を揮ひけれど、市民は深く其善政に信賴したりき。斯くてメヂチ家
の一族なるジョワンニは、一商賈の身を以て二度までも「正義の旗手」に擧げられ、其子コスモ
一世は又「人民の友、國家の父」と呼ばれ、鉅萬の富を擁して國家の要職を占め、外は伊太利の
平和に心を致し、内はフィレンツェの繁榮を圖り、文學美術を獎勵し、學者を保護したり。其
孫ロレンゾ・メヂチ（一四四八―九二）は更に父祖の志を紹きて、人民の權利を伸張せるのみなら
ず、文藝の保護者を以て自ら任じ、其庭園を開放して學園となし、巨資を投じて遍く伊太利及び

希臘の珍籍を集めて、公共の圖書館に藏め、又天下の名匠を聘してフィレンツェの美觀を添へしめければ、一時文物燦然として起り、フィレンツェは伊太利に於ける文藝復興の中心となるに至りけり。

羅馬の改革者 コラ・ヂ・リエンジ

最後に羅馬なる法王領に於ては、一千三百九年彼の「バビロニヤの俘囚」事件起りて、法王が居をアビニオンに遷せし以來、十四世紀の大部に亙りて、羅馬は全く其權力の中心を失ひ、豪族互に權勢を争ひて鬭争の絶間なく、古羅馬の面影を傳へし祠堂、宮殿其他の貴重なる記念物は、悉く是等諸族の堡壘となりて痛ましき殘害を蒙りけり。中にも勢力を振ひたるはオルシニ及びコロナの二族にして、此兩家の抗争は常に全羅馬領の紛亂の種子となりぬ。此時に當り、深く伊太利の現狀に憤慨し、身を提して國家の改造に從へる一人の豪傑現れたり。名をコラ・ヂ・リエンジといひ、一千三百十三年羅馬に生れ、微賤より起りたれど夙に秀才の聞え高く、愛國詩人ペトラルカの門に學びて、深く其精神に鼓吹せられ、羅馬の古典を繙き、或は目の當り古羅

馬の遺物を見て、其盛時を追懷するにつけ、感慨禁すべからざるものありて、私かに羅馬の自由を恢復し、羅馬市をして再び世界の君主たらしめんと希望を抱きぬ。是に於て一千三百四十七年五月、偶々豪族コロナの羅馬に在らざるを機とし、リエンジは羅馬の大議事堂に立ちて、國事の日に非なるを慨し、雄辯宏辭を揮うて大に民心を鼓舞しければ、人民忽ち其説に傾倒し、リエンジを推して護民官となしぬ。是に於てリエンジは市民の後援によりて頑強なる貴族を壓服し、浮浪の徒を逮捕して、悉く市内の秩序を恢復せる後、其名望を藉りて、伊太利統一の理想を實現せんと欲し、使節を四方に送りて、トスカナ、ボロニヤ、ロンバルヂヤの諸君主に説くに「神聖羅馬共和國」の創設と伊太利諸市の自由とを以てせしめ、更に進んで大に爲す所あらんとせしが、其策宜しきを得ざりしと其行爲稍常軌を逸したるとによりて、忽ち民衆の心を失ひ、法王より破門の命を受けて羅馬より放逐せられ、其志業一朝に挫敗したり。其後法王インノケン

ト六世の命を體して、再び羅馬に入りて、護民官となり、法王の爲に其領土を恢復せんと力めけるが、名威双つながら地に落ちしが爲、却りて大に國人に憎まれ、一千三百五十四年十月假粧して羅馬を逃れんとするに際し、暴民の爲に空しく其命を失ひけり。思ふにリエンジの改革が忽

ち挫折したる所以は、嘗に其時機の尙ほ早かりしが爲のみならず、リエンジ其人の性格の中にも此悲劇を形作るべき素因の潜めるものありしなり。蓋彼れは本来一個の理想家にして實際の手腕に至つては遙かに其理想に及ばざりき。されば彼れが改革の一度成功して一躍護民官の要位に擧げらる、や、彼れの心は忽ち其平調を失ひて、虚儀虚飾に心を奪はれ、自ら「羅馬の救済者、伊太利の擁護者、人類、自由、平和、正義の友」と號し、七箇の王冠を造りて其威嚴を示すに至りき。リエンジの死後教宰アルボルノヅといふもの次いで法王領の擾亂を鎮め、其分離せる部分を統合せんと力めたれど遂に其功を奏せざりき。尋いで一千三百七十七年グレゴリオ十一世がアギニオンより羅馬に歸り「アギニオンの俘囚」は爰に局を結びたれど、爾後法王の威望全く衰へ法王領内に於てすら其命令行はれず、豪族は各市に割據して勢を振ひ、市邑村落は相ついで貴族の采邑となり、殆ど獨立不羈ともいふべき程の自由の羅馬、ペルーギヤ及ポロニヤ等の古代共和國に與へらる、時とはなりぬ。

第三章 其他の歐洲諸國

西班牙に於ける基督教國の勃興

西班牙人は國內に於て異端討伐の事に忙しく、凡そ八百年間殆ど寧日無かりき。十世紀並に十一世紀の頃、就中アブデルラーマン三世(九二二—九六二)の時には、ムールの開化隆盛を極めたり。コルドヴには當時六百の回教會堂あり、又國中に十七の大學、七十の大圖書館ありて、ムール王の艦隊は廣く地中海を威服せり。但し其猶太人及び耶蘇教徒に對する政策は至つて寛大溫和なりしが、十二世紀に至り漸く奢侈に流れ兵權總て大臣の掌中に歸したり。是等の大臣中にハケム二世(九七六—一〇〇三)の將官アルマンヅルは殊に高名なる者にて、嘗てレーオン府を取り並に聖ジエームスの寺院を劫掠しぬ。其後コルドヴ王國は四分五裂し、北西の地方なる耶蘇教徒西ゴッス人は、オギエドといへる小王國を建てき。是後にレーオン國と稱せし者なり。西班牙に於ける他の耶蘇教徒はサンチョー大王(九七〇—一〇三五)の時一度統一せられしが、其死後再

び四分五裂せり。王の子夥多ありし中にフェルナンド一世といふあり。彼れは父の遺産としてカスチラを得て王たり。尋いでレーオン及アスツリヤスの地も、幾ばくもなくカスチラ國に合せり。而して大王の第二子はアラゴンを、第三子はナヴールとビスケーとを得たり。フェルナンドの時異教徒討伐の擧あり。後に中世ロマンスの主人公として廣く其名を謳はれたる當代の英雄シードの活躍せるは此際の事なりき。

國民的英雄シードの功業

シードは本名をロドリゴ・デアズ・デ・ビヴールといひ、一千四十年の頃カスチラの領内なるブルゴースに近きビヴールの城に生れ、初めフェルナンド一世の子サンチョ二世の爲めに戦ひて、幾多の戰場に武功を顯し、「シード」(君主)若くは「エル・カムベヤドール」(勝者)の名を一世に轟かしぬ。こは其敵たる亞刺比亞人が彼れの驍勇を讃へて斯く呼べるより來れりといふ。サンチョ二世の死後嗣王アルフォンソに仕へ、一千七十四年にはオギエドー伯の女ヒメナを娶りけるが、其後事によりてカスチラより逐はれ、爾來部下の自由隊を率ゐて諸方の宮廷を遍歴し、或

時は基督教徒の爲に戦ひ、或時は又回教王の身方となりて幾多の歲月を送りし後、一千九十四年グレンチャを略して、悉く其市民を屠り、爰に始めて自己の王國を建設せり。爾後數年の間頑強なる回教徒と對抗して善く其國を保ちたれど、一千九十九年アルモラギ族の大軍潮の如く攻來り、身方の軍は脆くも破られたりと聞き、憂憤の極、病を發して逝りぬ。其後貞實なる妃ヒメナは健氣にも亡夫に代りて三年の間其國を支へたれど、終に勢極まりて城を致し、亡夫の屍を奉じて故郷カスチラに歸り、サン・ペドロの修道院に葬りけり。歴史上のシードは要するに一個の梟雄にして、其一代の行爲は往々殘忍暴戾を極めたれど、其死後百年を経る間に、其性行は何時ともなく國民の理想によりて醇化せられ、終には西班牙半島の擁護者、基督教の戰士、忠君、愛國、勇敢、正義、寛容など有らゆる武士の美德を具備せる國民的英雄として、種々のロマンスの主人公となり、十二世紀以來廣く歐洲の諸國に傳誦せらるゝに至りき。

西班牙王國の統一

其後西班牙に於ける耶蘇教國は互に相闘ぎ、絶て一致する能はざりしかは、異端撲滅の事久し

く其功を成すに至らず、其後數年を経て、アルフォンソ四世（二〇七二—二〇九）の時に及び諸州漸く合體し始めて強大なる一耶蘇教國を成しき。斯くて西班牙に於ける基督教國は、東北にアラゴンあり、北にナヴァールあり、西北にカスチラ、レーオンあり、互に力を協せ次第に南下し來りしが、此折しも耶蘇教徒の征服の進路は、忽ちアルモラギ族の侵襲の爲に妨げられき。彼等は回々教諸君王の招請によりて、一千八十六年亞弗利加の地より來り、自ら一王國を創立してブレンチャを征略し、耶蘇教徒を惱すこと甚しかりき。當時熱心なる回教徒にアルモラギ教徒といふ一新派ありしが、此頃モロッコを征略して西班牙の地へ渡り來れり。是に於て乎、異教徒も亦三黨派に分れ互に相搏噬せり。一千二百十二年、カスチラ、レーオン及ナヴァールの三王國相協同してアルモラギ教徒を討するや、日耳曼、佛蘭西、伊太利の三國六萬の十字軍を送りて之を助け、トロサの地にて大に異教徒を破りぬ。次で十字軍は葡萄牙の小王國を創立し、竝にカスチラ、アラゴンの二州を定む。是等の國々は後に商業並に新土發見の歴史に大關係を有せし者なり。此時よりカスチラ、アラゴン及び葡萄牙の三國は、モスレム（回教徒）の支配に對抗せる國となりき。此等の王國は次第に進歩し、葡萄牙は殊に太平洋に沿うて範圍を擴め、アラゴンは地

中海に沿ひて土地を弘め、其主權者なるカスチラは内地に於て擴張し、遂に今の西班牙の大半を有するに至りき。斯くて十三世紀の後期に至りては、回教徒は南部のグラナダ王國のみを領しけるが、一千四百九十二年に至りて、終にカスチラ及びアラゴン二國の王フェルナンドとイサベルの爲に征服せらるゝに至りぬ。而して此二王の婚するや、兩國合同し、一千五百〇六年に至り國內一統に歸す。斯くて中世の後期に至り、アラゴンは英國の東岸に沿へるを以て歐洲の政治上に主要の部分を演ずるに至り、カスチラと葡萄牙とは海上探檢の道を開きぬ。

葡萄牙人航海業に勵む

葡萄牙はもとカスチラの屬邦なりしが、一千九十五年の頃カスチラ兼レーオン王アルフォンソ六世、ミンホー河及びドロー河の間なる地を後に葡萄牙伯と稱號せし皇婿アルゴニウのアンリーに與へき。其嗣アルフォンソ一世一千百三十九年オーリクスの役にて大にムール人を破り、軍隊に推されて王と稱し、後法王の認可をも得しかば、カスチラ王も亦認めて獨立の王國となせり。幾くもなく王兵を出してリスボンを略し、首都を爰に定めき。其子サンチョー一世（二一八

五十二二) はムール人の征服と農業及び小作人を奨励せしことを以て名あり。要するに十五世紀に至る迄の此國の歴史はムール人並にカスチラ人との戦争、王と貴族との挑争、王位の争及び一方にては君主と君主、他方に於ては僧侶並に法王と君主との間の争亂相連續せり。デオニス三世(一二七九—一三五五)の時工業學問商業航海の道大に開け、次第に隆盛の運に向ひ、リスボン大學も此時に創設せられき。アルフォンソ四世(一三三三—一三五七)ベドロ一世(一二五七—一三六七)相繼いで國運を伸張し、商業愈々繁榮を致しき。ジョワン一世(一三八五—一四三三)は未だ王とならざりし時、リスボン附近にてカスチラ人と戦ひて之を退け、初め攝政となりしが、終には王位に登り、新王朝を創立せり。王の時亞弗利加のセウタをムール人より奪ひ、マデイラ群島を發見し、一千四百三十二年にはアソレス群島を併有せり。是等の發見は、王子エンリケ航海者(一三九四—一四六〇)の奨勵に負ふ所多し。尋いでアルフォンソ五世(一四三八—一四八二)ジョワン二世(一四八一—一四九五)の世に至りては、外には新陸地の發見に力を盡し、内には王權の基礎を固め、國運隆昌の基を開きぬ。

スカンデナヴィヤ諸國

敘して爰に至りて、略中世に於ける西歐及び中歐の諸國をば通觀したれど、尙ほ此他に、北方にはスカンデナヴィヤ諸國あり、東方にはスラヴ諸國ありて直ちに蒙古人に接し、其南方には匈牙利人及び土耳其人ありて、常に東羅馬帝國の患たりき。此中スカンデナヴィヤ諸國は、九世紀及び十世紀に於ける彼の北人の移住によりて、其國民の精銳を虚うせる結果として、久しく撓々しき活動なかりしも、其文化は徐々に進みて、九世紀に於ける丁抹人の改宗を始めとし、十世紀には那威の改宗あり、十一世紀には瑞典の改宗ありて、後にはスカンデナヴィヤの戦士も十字軍に加はるに至りき。されど其後三國相分れて互に紛争を絶たず、以て十四世紀に及びぬ。此時「北方のセミラミス」と呼ばれたる丁抹の女傑王マルガレテ出で、一千三百九十七年に於ける所謂「カルマー合同會議」によりて一時三國の一統成りたれど、マルガレテ女王の死後三國の統一忽ち破れ、瑞典先づ背きて同盟を破り、終に一千五百二十三年グスタフ・ヴサの出づるに及びて其獨立を完成したり。されど那威は尙久しく丁抹の勢力の下に屈して其治を仰ぎたりき。

匈牙利人の西漸

ダニユーブ（ドナウ）河一帯の地は、由來東方亞細亞より西方歐羅巴に至るべき通路に當れるが故に、東方より移動せる各種の民族は、概ね一度は此地に入りて足を留むるを例としたり。即ちゴッス族、匈奴族、アヴール族、ブルガリヤ族、マジヤール族、スラヴ族の如き、何れも此地方に於て一度其王國を建てざるはなかりき。中にもマジヤール族が、カルパチヤ山脈を横りて匈牙利の地に入りたるは、第十世紀の中葉にして、爾來此地を根據として屢々西方の諸國を脅かし其勢一時全歐を震撼せしが、ハインリッヒ一世及びオットー大帝に破られし以來、其國に屏息するに至りき。匈牙利最初の王を聖ステファンといひ、紀元一千年法王シルエストル二世より王冠を得て王位に登りぬ。爾來三百年を経て其王統絶えしかば、時の法王ボニファチウス八世は、其王位をナポリ王なるアンジュー家のシャル・ロベールに與へしが、ロベールの子ルイ大王（一三三二—一三七八）の時に至り、匈牙利は一時隆盛を極め、ルイはカシミル三世に繼ぎて波蘭の王冠をも併せければ、其領土はカッタロ河より、ギスチュラ河口に及び、西は奥地利より東は黒海に達しき。

ルイ大王の死後、王女マリア後の日耳曼皇帝シギスムンドと婚して、共に此國を支配せしが、其間に男子なく、王女を以て奥地利家のアルベルト二世に嫁しければ、一千四百三十七年シギスムンドの歿するや、アルベルト二世位を襲ぎぬ。これ奥、匈二國の合併せる始めなり。此頃より土耳其人の來寇絶えず、長く匈牙利の患をなしき。

波蘭の強盛

マジヤール族の西漸によりて、スラヴ族は自ら三箇の集團に分れたり。北部のスラヴ族は、ダニユーブ河南なるセルギヤ、クロアチヤ、ダルマチヤ等のスラヴ族と全く相分離し、其内北西なる日耳曼の境に瀕せるものは、ボヘミヤ、及び波蘭の二國をなし、其東部に擴がれるものは露西亞を成しぬ。此内中世に於て獨立の王國となれるものは、露西亞及び波蘭なりき。波蘭が初めて基督教に改宗せしは、十世紀の後半なりしが、尋いでボレスラフ一世初めて王號を稱し、ボレスラフ三世勝王（一〇二二—一〇三三）の時ボメラニヤを征服して勢を振ひぬ。其後内亂ありて一時國勢大に衰へしが、カシミル三世大王（一三三三—一三七〇）出で、頽勢を挽回し、大に露西亞人を

破りて、國境をドニエブル河邊にまで及ぼせり。大王は男子なかりしかば、其甥なる匈牙利王ルイを擧げて繼嗣となせしも、ルイも亦繼嗣を遺さずして死せしかば、一千三百八十六年貴族ら相議してリトワニヤ太公ヤゲロンを擧げて王となし、ウラヂスラフ二世と稱せしめき。是に於て波蘭はリトワニヤを合せて、俄に其疆域を倍加せしのみならず、其後更にチュートン武士團を破りてオーデル河よりフィンランド灣に至る地方をも大半其領土に加へければ、其威勢は赫々として四隣を震懾せしめき。

露西亞の建國

露西亞は、初めスカンヂナギヤより來りしルス族の酋長ルーリックが南下して、土着のロスキ族を征服し、八百六十二年ノヴゴロッドを首都として國を建てし以來、其子孫相繼いで地を東方に拓き、程なく都をドニエブル河畔のキエフに移し、次第にロスキの各種族を統一し、南下して屢々希臘帝國を侵すに至りけるが、ウラヂミル一世(九八〇—一〇一五)の時、希臘の皇女アンナを迎へ、國民を擧げて基督教に歸依したり。其子ヤロスラフ一世(一〇一九—一〇五二)は聖書

を露西亞語に翻譯せしめ、多く希臘の工匠を招聘して首都の面目を一新し、國民の開發に力を注ぎければ、キエフ太公國の勢頓に興隆せり。其死後國內分裂して數多の小邦となり、内亂相續きしが、此間に東方亞細亞の地に於ては蒙古族の酋長成吉思汗出で、廣大なる領土を拓き、次第に西漸して一千三百三十七年には、其將拔都大軍を率ゐりて歐洲の地を侵しぬ。此時キエフ公國は忽ち蒙古人の蹂躪する所となり、波蘭、シレシヤ、モラギヤ、匈牙利は相續いで其侵略を蒙り、爾來二世紀の間、露西亞人は蒙古人がブルガ河畔に創立せる欽察國の政令の下に在りて、年々貢賦を收めたるのみならず、露西亞諸侯は其位に即くの時に當り必ず黑龍江の畔なる大汗に忠誠の誓をなさいるを得ざりき。蒙古族入寇の當時に於ては、ノヴゴロッドは露西亞領の中心なりしが、十三世紀の終りに至りモスクワ(モスコ)は新たに露國の勢力の中心となりぬ。第十四世紀に入りて、リトワニヤ及び波蘭は西部露西亞に於て着々侵略を試みつ、ありし間に、モスクワ公國は東方に向つて新領土を開き、今日の露西亞の基を築けり。露西亞王國の創建者と稱せらる、イヴン一世(一二三二—一三〇〇)は、近隣の諸侯を服して、一千三百二十八年初めてモスクワを首府と定めき。尋いでデミトリイ・ドンスコイに至り、一千三百八十年欽察汗の軍を破り

て一度獨立を遂げしが、一千三百八十二年モスクワは蒙古人の爲に焼かれ、市民の虐殺せられしもの二萬四千人に上りき。其後欽察國の衰運に乗じて、モスクワ公國は漸く強大を致し、終にイヴン三世（二四六二—一五〇五）の時に及び、其勢旭日の如く、カザンを取り、ノヴゴロドを服し、一千四百八十年欽察汗の大軍を破りて、全く其支配を脱したり。イヴンは希臘の皇女ソフィヤを迎へて妃となしけるが、爾後モスクワの王家は、希臘帝國の紋章たる双頭の鷲を取りて自家の徽章となし、自ら希臘皇帝の繼承者たる矜持を示しぬ。イヴン三世の時には尙ほ「露西亞太公」と稱せしが、其孫イヴン四世に至り初めて「全露西亞の皇帝」と號しぬ。

斯く東歐羅巴に於て、蒙古族及びスラヴ族の諸國の關係互に紛糾を極めつ、ありし時に當り、新たに亞細亞より來れる雄強なる一民族ありて、忽ちバルカン半島の全部を席卷し、遂にコンスタンチノーブルを奪ひ、希臘帝國を滅ぼして、爰に中世暗黒の幕を切つて落しぬ。是れ即ちオットマン土耳其の勃興にして、歐洲の中世史は此掉尾の大活劇を以て其終を告げけるなり。

第四章 中世掉尾の大活劇

オットマン土耳其の威名全歐に振ふ

時に一千三百九十六年オットマン土耳其の王バヤジッドは、匈牙利王シギスムンドの率ゐる十萬の騎士軍をブルガリヤのニコボリに粉碎し、日ならず伊太利に入りて、馬を聖ペテロの大會堂に繋ぐべしと豪語しつ、勢に乗じてコンスタンチノーブルを圍み、先づ希臘帝國を滅し、然る後大舉して西に向はんとせり。此報西歐に達するや、諸國民は震駭して色を失ひたれど、既にニコボリの敗戦に怖氣づける彼等は、俄かに再度の援軍を送らん術も知らざりけり。抑、オットマン土耳其族といふは、一にオスマンリ土耳其族ともいひ、元來蒙古人の一分派なる突厥族の一部落にして、今のトルキスタン地方に在りて遊牧の生活を營みし民なるが、十三世紀の初め他の蒙古人の銳鋒を遁れて、カスプ海の東方より小亞細亞に入り、セルジューク土耳其族の建設せしイコニヤム（コニヤ）王國に仕へけるが、其後酋長オットマン（二二八八—一三二六）の

時イコニヤム王国を倒して獨立し、一千三百二十五年希臘帝國の領地なるビチニヤを侵し、小亞細亞の一要市ブルーサを占領し、次第に帝國の地を略しぬ。是より先、希臘は彼の第四十字軍の爲に其帝都を奪はれて一時小亞細亞に逃れてニケヤ帝國を建てたれど、其後拉甸帝國の内訌に乘じ次第に其地を恢復し、一千二百六十一年再びコンスタンチノープルを獲て其帝國を再建したり。されど此頃に至り、國內には黨派の争絶えず、國勢殆ど衰滅に傾しつゝ、ありければ、此新興の蠻族に對して斷乎たる處置を下す能はざりき。此に於て乎オットマンの子ウルカン（二三六一三五〇）の位に即くや、ニコメヂヤ、ニケヤ及びイリウムは悉く土耳其王の手に歸し、其領土は終にボスポラスの沿岸に迄達したり。時に希臘帝國には會内亂ありて、其一派は援を土耳其人に求め來りしかば、ウルカンの子ソリマンは一千三百五十三年兵一萬を率ゐてボスポラスを横切り、敵黨たるブルガリヤ人の地を侵せしことありしが、此時より即ち希臘人の與し易きを知り、程なく一隊の兵を筏に載せて對岸に達し、ガリポリ半島の一角に其最初の立脚地を作りぬ。尋いでソリマンの弟ムラート一世（一三六〇—一三八九）はトラキヤ（スレーズ）の全土を略して都をアドリヤノープルに奠め、セルギヤ、ブルガリヤの諸國を征服し、其領土は希臘帝國を包圍するに

至りければ、皇帝も貢を納れて臣禮を執るに至りき。然るに一千三百八十九年セルギヤ、ボスニヤ、ブルガリヤの諸國同盟して土耳其人に叛きしかば、ムラートはコッソヅの原に於て大に同盟軍を破りたれど、ムラートも亦セルギヤ人の爲に陣中にて暗殺せられき。ムラート一世は其俘囚とせる基督教徒の子弟中より美にして且つ強健なるものを拔擢し、之に回教徒の嚴格なる訓練を授けて「ジャニザリー」と稱する一隊の親兵を組織せしが、爾來此親兵は勇猛を以て顯れ、羅馬に於けるプレトリヤ親兵、東羅馬に於けるブランギ隊、若くは埃及に於けるマメルク隊の如く、時としては其勢力皇帝を凌ぐ程になりぬ。ムラート一世は以上のジャニザリー隊の外に、又スバフィスと呼べる騎兵を備へ、平生より訓練を怠らざりしかば、當時尙ほ常備軍の設なかりし歐洲諸國にては、此強勢なる軍隊に敵し兼ねて、戰ふ毎に破られけるなり。ムラート一世に繼ぎて位に登りしバヤジッド一世（一三八九—一四〇三）は武勇父に勝り、兵を行ること神速なるが爲に電光の渾名を得たる程にて、其位に即くや、マケドニヤ、テッサリヤ、及び希臘を討服して、遙かにペロポネサスの南端に及び、更に北進して匈牙利の邊境を侵すに至りければ、西歐の諸國は之が爲に震駭し、匈牙利王シギスムンドはブルゴーニュ公ジャンと共に匈牙利

日耳曼、佛蘭西の武士十萬を率ゐて東方に向ひぬ。然るに基督教軍はニコポリに於て散々なる敗北を取り、シギスムンドは海路を取りて國に歸り、佛國の諸侯武士は多額の償金を拂ひて纒かに俘囚を脱しけれど、其以下なる十萬の俘囚は、悉くバヤジツドの爲に虐殺せられき。是に於てコンスタンチノープルは忽ち重圍の中に陥り、希臘帝國の運命既に此時を以て殆ふかりしに、圖らざる救援現れて、帝國に借すに尙ほ五十年の壽を以てするに至りき。圖らざる救援とは、土耳其人の強敵たる蒙古王帖木兒の出現なり。

帖木兒蒙古王國を再興す

帖木兒は又タメルランと呼ばれ、自ら成吉思汗の後裔と稱し、衰頽せる大蒙古王國を復興して武名を東西に輝かしたる一代の豪傑なり。彼れは一千三百二十二年頃サマルカンド附近の小領主の子に生れ、察合台汗國に仕へ、帖木兒跛者の名を以て國人の間に知られたり。世にタメルランといふは、帖木兒跛者の轉訛せるものなりけり。是より先、成吉思汗の死後、第三子窩濶台、可汗の位に登り、子孫相承けて倍々其國運を伸暢すると共に、第二子察合台はトルキスタン、

アフガニスタンの地方を領して察合台國を建て、季子拖雷の子旭烈兀は波斯を征服し、バグダツドの教王を滅して、イルカン國を建て、又長子朮赤の子拔都は大軍を率ゐて歐洲に侵入し、其征服せる露西亞の地を得て欽察國を建てたり。斯くて其勢百年の間振ひけるが、第五代の可汗忽必烈自ら位に登りて、都を和林より北京に移せし以來、國內の統一漸く弛み、爾來内亂諸方に起りて、帖木兒の生れたる頃には成吉思汗の大帝國は既に四分五裂の有様となり、また昔日の勢なかりき。されば帖木兒は夙に其同族の衰運を慨し、私かに其祖先の遺業を恢復せんとの心ありけるが、終に其同志を語らひて兵を起し、一千三百七十年の頃に至りては悉く察合台國を一統せり。爾來帖木兒は其民族を率ゐて四方の征服に向ひ、其勢破竹の如く、遂に支那の長城より地中海に至り、埃及の境界よりモスクヴに至る諸州を併呑して、到る處に於て殺戮を恣まにせり。即ち其波斯に入るや、イスバハンに於ては七萬の市民を屠り、印度のデーリに於ては、其近親なる大モーグルの帝位を安泰ならしめんが爲に十萬人の俘虜を殺戮しき。案ずるに市邑の門外に首級の塚を築きて、其戦勝を記念するは彼れが無上の誇なりしが如く、其後バグダツドに於ては、九萬の首級を積みて、一大金字塔を築きたり。總じて帖木兒が足跡の及ぶ所、破壊は必ず之に

従ひ、莊麗なる都會も忽ち一片の焦土となり、一度繁榮せる地方も一朝にして無人の曠野と化するを例とせり。

是より先、帖木兒は、同族なる欽察國と事を構へければ、一千九十二年四十萬の大軍を率ゐて露西亞に入り、日耳曼、波蘭、リトワニヤ、露西亞、欽察の聯合軍を粉碎し、到る處の都市を焚きて、遙にモスクヴに達しけるが、會、嚴冬に際して、兵を班し、尋いで印度を征して、ガンガ河の岸に達しぬ。希臘皇帝が土耳其人の侵略に苦める極、遙かに使を送りて帖木兒の救援を求めしは恰も此時なりき。帖木兒も亦會てより土耳其征服の志ありければ、機乗すべしと爲して之に應じ、直ちに兵を出して背面よりオットマン土耳其の領土を衝かんとしければ、バヤジッドは其報を聞きて俄にコンスタンチノーブルの圍を解き、急遽ボスボラスを横りて此大敵の防禦に向ひぬ。斯くて世界の征服者たる帖木兒跛足と希世の勇將たるバヤジッド電光とは爰に其雌雄を決せんとて互に戦備に従ひぬ。帖木兒は此決戦に先ち敵の後援を絶ちて我が背後を安んぜんと欲し、先づ軍を埃及に進めて其軍を破り、それよりシリヤに入りて、アレクポ、ダマスカス、バグダッドの諸市を焚き、進んでアンキラ（アングラ）城を圍みぬ。是に於てバヤジッドは大軍

を提けて來り、時に一千四百二年六月十六日、兩軍遂にアンキラの平野に會しぬ。此時土耳其勢は四十萬、蒙古軍は八十萬と號し、共に精銳無雙なる常備軍なりけるが、戦は終に土耳其人の敗北に歸し、バヤジッドも力盡きて敵の虜となりぬ。斯くてバヤジッドの敵の陣中に引かれし時、帖木兒は自若として其子と棋を圍みつゝありけるが、直ちに命じてバヤジッドを鐵の檻に投ぜしめ、爾後宛然犬の如く生肉を與へて軍隊に隨從せしめきとなり。此一戦によりて小亞細亞は全く帖木兒に服しければ、七月の末を以て軍を歸し、更に支那征服の宿志を遂げんとして着々其準備を進めけるが、果さずして歿しぬ。時に一千四百五年四月なりき。帖木兒跛者が一代の事業は宛然颯風の一過せるが如く、一時は猛烈なる破壊力を揮ひて天下の人心を震撼したれど、其死するや忽ち煙の如く消えて、其廣大なる領土も速に瓦解せり。

コンスタンチノーブルの陥落

アンキラの一戦によりて、オットマン土耳其の王國は一時帖木兒の爲に滅されたれど、帖木兒死して、其大帝國の分裂するや、バヤジッドの孫に當れるムラート二世（一二二一—一二五二）は兵を

起して其國を再興し、遂に帖木兒の帝國を粉碎せり。此頃より希臘帝國は僅にコンスタンチノール及び其近隣の地に屏息し、其他は悉くオットマン族の所領となり、ムラート二世はブルナ及びコソボの原の戦にて、二度波蘭及び匈牙利の聯合軍を破りて愈々其勢力を堅めき。斯くて其子ムハメッド二世（一四五二—一四八二）位を繼ぐに及び、遂にコンスタンチノールを陥れて、土耳古帝國の都となしければ、過去一千年の間歐洲東方の藩屏として、亞細亞民族の侵入を支へ來りし東羅馬帝國も、今や皇帝コンスタンチヌス十二世の花々しき戦死と共に滅亡し、中世は爰に其最後の幕を閉ぢたり。

通俗世界全史 第八卷 終

昭和二年六月十日印刷
 昭和二年六月十日發行
 通俗世界全史第八卷
 封建列國史

編輯兼 發行者 早稻田大學出版部

右代表者 東京府豊多摩郡 戸塚町下戸五十八番地 種村宗八

印刷者 東京市牛込區早稻田 竹内喜太郎

發行所 早稻田大學出版部
 (振替 東京一三二四五 名古屋二三四五)

不許複製

日清印刷株式會社印刷

K 214

Handwritten text on the left edge of the page, possibly a library or collection identifier.

Faint, illegible text or markings in the center of the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

556
153

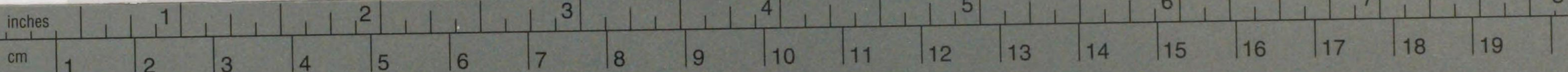


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black